

乳剤の三四十倍液其他除虫菊合剤を噴霧器を以て灌注するが宜しい。乳剤類を使用すれば、或は蕾に害になると心配する人もあらんが蕾が未だそれ程太くなつては居らず、且乳剤の製法さへ完全であるならば、更に心配するの要は無い。

八 うめしやくどり *Cistitia congearia* Guén.

此害虫は梅を害すると同時に、桃の葉を喰害することが少くは無い。梅の害虫を参照して貰ひたい。

九 も、のはまきむし

*Tachyphila subsegnella* Hb.

此害虫の幼虫は、葉を先端より折り曲げ、其中にあつて喰害するものであるが、併し大なる害は無い。成虫は小形の蛾であつて、體長二分、翅の開張五分内外、全體暗灰色であつて、前翅に紫色の光澤がある。幼虫は、十分生長す

第 十 八 三 圖



(農事試験場特別報告原圖)

れば體長三四分に達し、頭部は淡褐、胴部は帯綠黃褐色であつて、各節に小隆點を有し、それより細毛を生じて居る。蛹は長さ三分五厘、赤褐色であつて、捲いた葉の中に化するものである。經過は一年に三回であつて、未だ判然としない。幼虫は五月頃より出で、六月に成虫となり、七月に又第二圖の幼虫となり、八月頃に成虫となる。卵は未だ不明である。

驅除豫防法

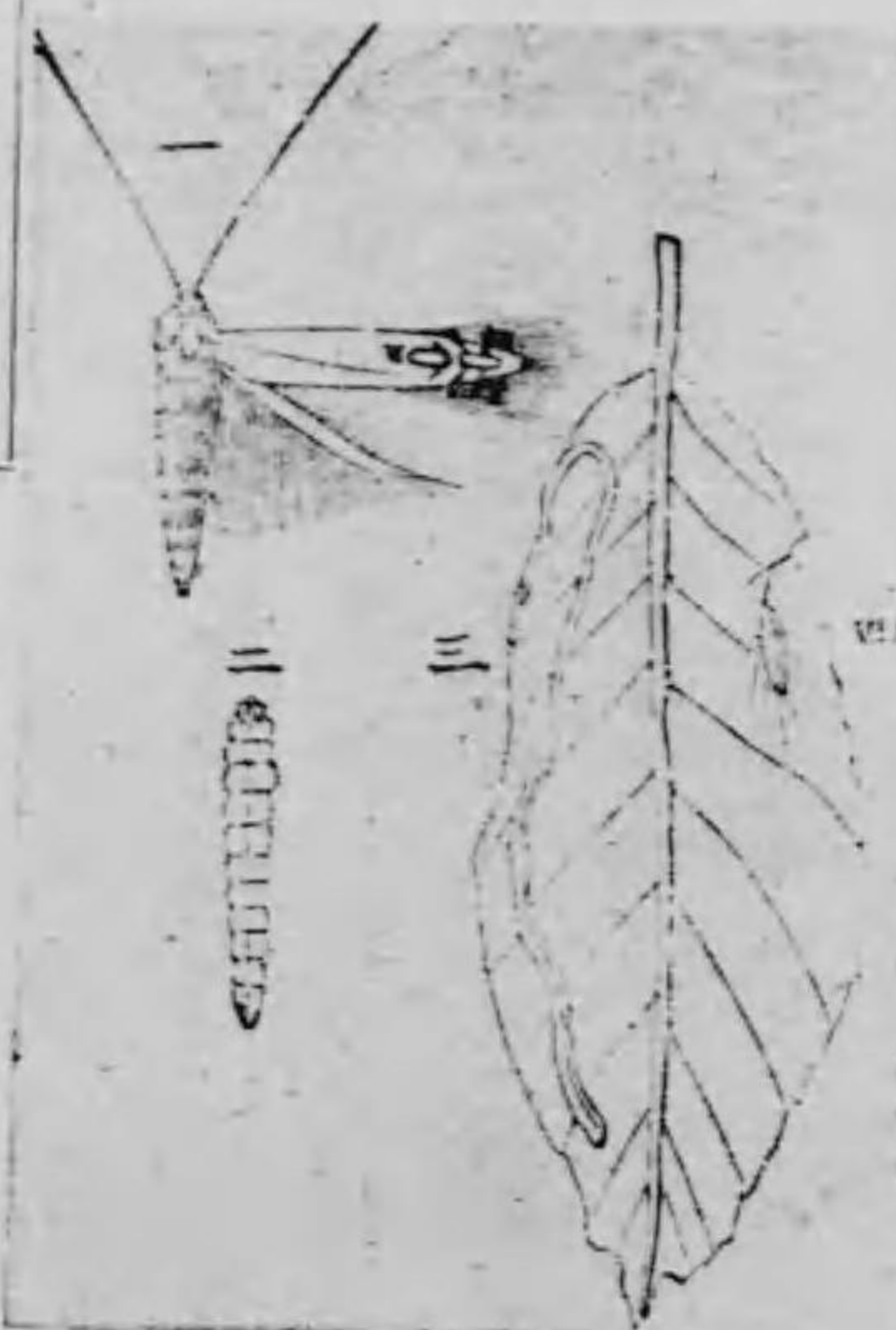
驅除豫防法は、被害葉と共に、摘採して焼却するより外、致し方は無いのである。

一〇 も、のはむぐりむし *Iyonetia clerkella* L.

此害虫の幼虫は、葉の組織内を喰ひ歩くものであつて、俗に字書蟲と稱せられるものである。成虫は小形の蛾であつて、體長一分、翅の開張二分、全體灰白色であるが、縁毛が長く、且つ前翅の先端に、橙黄色の斑紋がある。卵は圓形白色、一粒宛、葉の表皮下に産まれる。幼虫は長さ一分八厘餘に達し、稍扁平であつて、全體淡綠色である。蛹は葉の内部を去つて、裏面又は枝間に、白色紡錘狀の繭を造り、入り、淡綠色であつて、長さ一分三厘餘ある。經過は一年七回と云ふ多數であつ

ちんのはむぐりむし (佐々木博士原圖)

第四十八圖



驅除豫防法

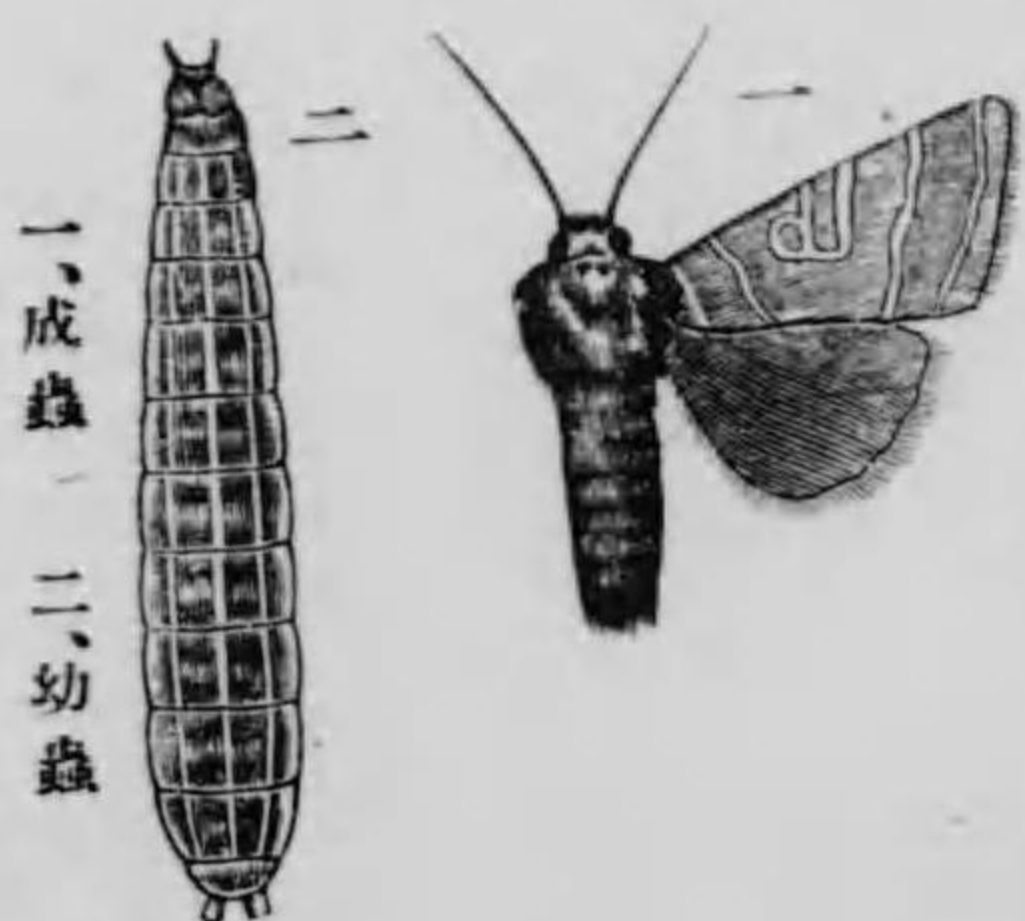
驅除豫防法は、特に有効なる方法が無く、只落葉を集めて焼却すること、蛹化前樹を急に振動すれば、幼蟲が落下するものであるが故に、下に布を敷いて、それを集めて殺すと云ふこともあるが、實用上には考へものである。尙將來の研究に俟たなければならぬ。

花の害虫

一一 も、のはなむし Mesogona divergens Butl.

て、卵より成蟲となる迄二十四五日しかかゝらない。最も東北、北陸地方の寒地に於ては、之より少くないのである。冬は成蟲を以て、温暖の場所に潜むで越冬をする。被害の爲めに葉は早く落下するものである。

第五十八圖



此害虫の幼蟲は、花蕾の膨らんだ頃より、内部に喰ひ入つて、雌雄蕊を喰害する者であつて、關東、關西、山陽、山陰の各地方に、其害が少なくは無い。成蟲は中形の蛾であつて、體長六分、翅の開張一寸二分、全體濃灰褐色を呈し、前翅には赤褐色の模様はなむし(佐々木博士原圖)

環狀紋及び線有して居る。幼蟲の十分生長したものは、體長一寸三分、全體淡赤褐色であつて、幾分綠色を混じ、各節に斜狀線がある。蛹は地中に化し、長さ六分餘、赤褐色である。經過は一年一回であつて、卵を以て冬を送り、翌年花蕾の膨らむ時代、外部より小孔を穿つて喰ひ入るものである。卵は扁平球狀であつて、脂紫色、新梢の先端の皮下に一粒づつ産まれる。幼蟲の害は多くは、一花に一頭宛入るものであつて、又一花を喰ひ盡せば、他に移り、花瓣を害することがないのであるが故に、外部より此の害を知ることが一寸困難である。幼蟲の體は花の底に卷いて潜むで居る。

驅除豫防法

驅除豫防法は、今日の所、只花を調べて幼蟲を捕へるより致し

方は無い。前述の如く幼蟲が蕾に孔を穿つて喰ひ入るものであるが故に、蕾の

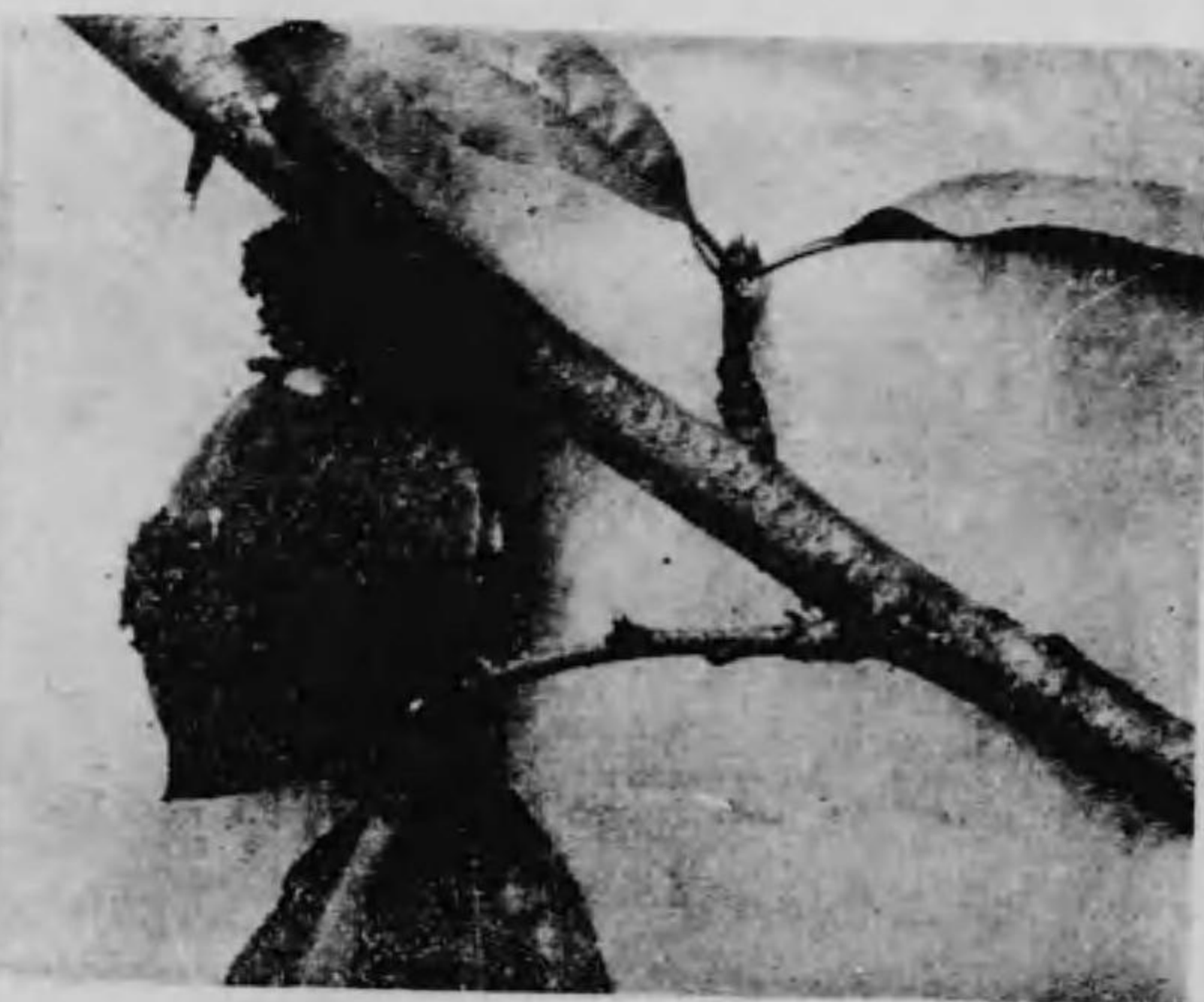
も、しんくひの害蟲 自然大

早くより毒劑の使用が有効であらうと考へられるけれ共、未だ實驗上の成績が無い。尙將來の研究に俟たなければならぬ。

### 果物の害蟲

#### 一三 も、のしんくひ

*Dichrocrois Punctiferalis* Guen.



(著者原圖)

張一寸内外、全體黃褐色であつて、其上に黒色の小點を附して居る。卵は球形であつて赤色、果物に一粒宛産まれる。幼蟲の生長したものは、長さ七分餘、頭部は

黒褐色、胴部は赤味を帯べる白色、各節に瘤點があつて、それより粗毛を疎生して居る。蛹は長さ五分餘、皮の裂け目、枝の叉等に、灰白色の繭を造つて入る。經過は一年二回であつて、第一回の成蟲は六月、第二回は八月、冬は繭に入つた幼蟲を以て、越年するものである。此の害を受けた果物は、早くより落下して腐敗するものであるが、中には糞と糸とに依りて、永く附着して居るものである。

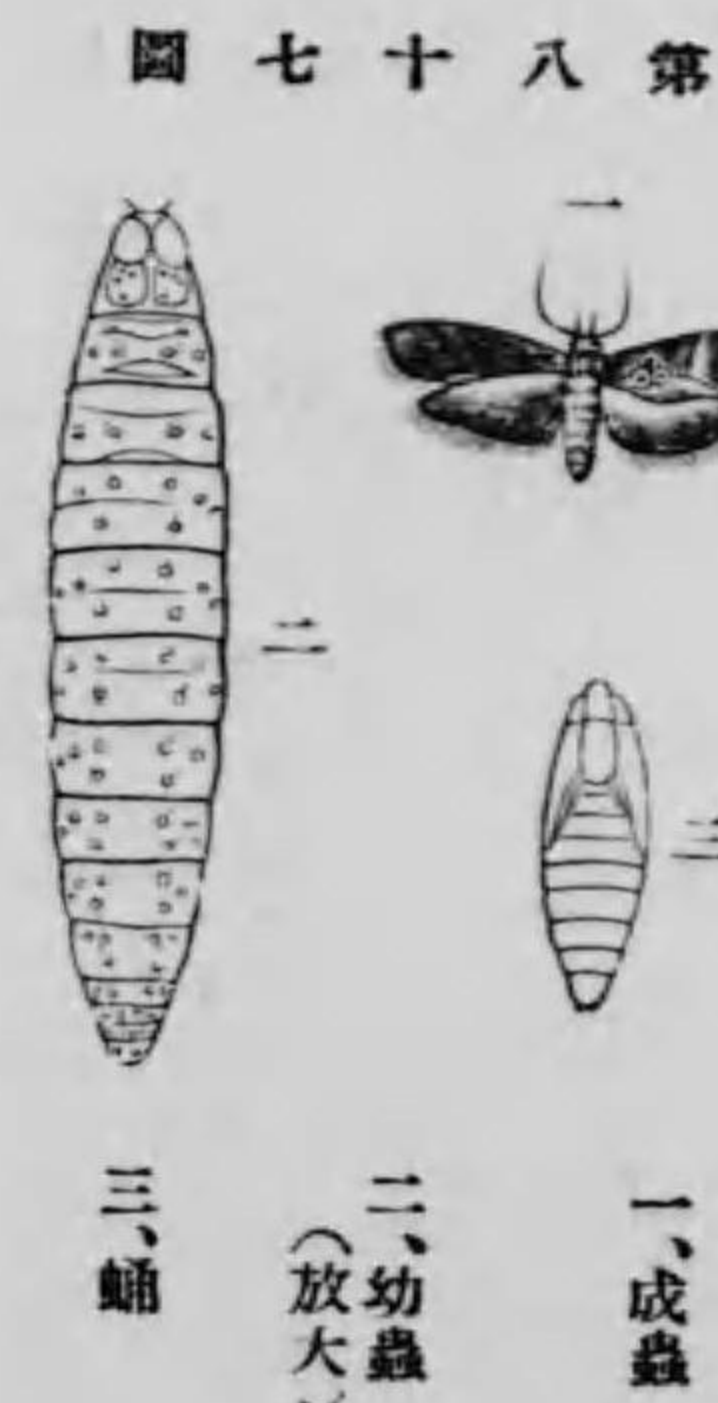
#### 驅除豫防法

驅除豫防法は、袋掛を行ふのが、最も安全の方法とする。此の外毒劑を落花後に使用する方法もあるのであるが、其應用に就ては未だ充分の研究が届いて居ない。殊に毒劑を混合すべき「ボルドウ液」は、桃の葉を落下せしむるものであるが故に、その使用を禁じなければならぬ。此の外落果の處分皮の裂目等に潜む蛹の捕殺も必要である。

#### 一三 も、のしんくひ *Carpocapsa sasakii* Mut.

此害蟲の幼蟲も、前種同様果物を喰害するのであつて、地方に依つては、此の害が却て多い場合がある。成蟲は小形の蛾であつて、體長二分五厘、翅の開張五分餘、全體灰褐色であつて、光澤を有し、前翅に數多の黒點がある。幼蟲は、十分生長

もゝのひめしんくひ



(佐々木博士原圖)

入り、濃褐色であつて、長さ二分五厘餘ある。

驅除豫防法

驅除豫防法は、前種に準するのであるが、尙蛹は地中に入るものであるが故に、冬季及び化蛹期の耕鋤を必要とする。

一四 あけびのこのはが *Ophideres tyrannus* Guén.

一名「ともへこのは」とも呼び、成虫は果物の成熟期に來つて、果物の汁液を吸収して、大害を加へるものである。幼虫は「あけび」「ひいらげ」「なんてん」「びはば」なんてん等の葉を喰するものであつて、果樹には關係がない。成虫は大形の蛾であつ



あけびのこのはが (縮小)

(著者原圖)

て、體長一寸二分、翅の開張三寸四分、頭胸部と前翅は濃灰褐色、腹部と後翅は橙黄色であつて、後翅に巴状の黒紋がある。翅を體の上に疊めば、恰も木の葉の如くであるが故に、此名稱がある。幼虫の十分生長したものは體長三寸、全體紫黒色であつて、第五節の側面に蛇の目状紋があり、第六節の側面に弦月形の黄紋と、第九節に白斑、其他斜状線、小點等を有し、休止の時は、頭部を下方に巻き、蛹は葉を四五葉集めて、其に化し、長さ一寸一二分、全體褐色である。經過は一年二回の如く、冬は未だ不明であるが、成虫を以て越冬するものらしく、幼虫は前記の植物を食して生長し、桃果の成熟期に、夜間飛び來つて害を加へる。其害を加へた有様は、恰も針を以て刺した如く、早く腐敗して落下するものである。

第九十八圖



(著者原圖)

あかえぐりは

防上必要である。

一五 あかえぐりは *Calpe excavata* Butl.

一名「こがたのきのはが」とも呼び、前種同株成蟲が害を加へるものである。成蟲は中形の蛾であつて、體長七分、翅の開張一寸五六分、頭部は朱赤色を帯び、前翅は尖つて、外縁刻り取られた様に引込んで居る。翅頂より後縁に向

驅除豫防法

驅除豫防法は、丈夫の紙を以て造つた、袋掛けを行ふが宜しい。

尙此の袋に菜種油の如き不乾油を塗るを宜しとするのであるが、度を過せば、果物を害することがあるが故に注意しなければならぬ。此の外夜間見巡つて、果物の上に止まつて居る成蟲を捕へること、又被害の落果を集めて皮を去り、園内の一部に繩を以て吊り下げて置けば、夫れに多數集まるものであるが故に、夜間に於て捕へること、此の外に附近にある幼蟲の加害植物を除くこと、夕方より雜草を集めて燻烟すること等も豫防上必要である。

第九十圖



(著者原圖)

もゝのぞむし  
雌雄自然大

驅除豫防法は前種に準ずる。

一六 もゝのぞむし *Rhynehies hero* Roel.

つて一條の濃褐色線があり、全體赤褐色である。卵は球形であつて淡黄色、葉面に點々産まれる。幼蟲の老熟したものは、體長二寸三分に達し、全體灰褐色であつて、各節の間は黄色、且つ第八、九、十節に、氣門の部を通じて黑色條線がある。蛹は長さ七分餘、黒褐色である。經過は未だ不明であるが、成蟲は桃果の成熟期に出現して害を加へ、幼蟲は「あをつら、へくそかづら、あまちやづる」等の葉を喰するものである。

此害蟲の幼蟲は、果物内を喰害するものであるが、蟲糞を出すことなく、果物は縮み、且つ枝を切斷して置くのであるが故に、遂に落下するに至るものである。成蟲は中形の象蟲であつて、體長三分六七厘、全體紅葉色であつて、美麗である。卵は楕圓形であつて、水色、一粒づつ、果物の皮を咬み、内部に産み入れられる。幼蟲は肥大であつて、頭部は小形、胴部は横皺多く乳白色である。蛹は地中に入り、直徑二分

餘の繭に入り、其外部は土塊を以て包まれて居る。経過は一年一回であつて、冬

桃象虫の加害の状自然大 (著者原画)



一、二成虫の咬み切れる枝 三、無害果 四、五被害果

名『ちよつさりむし』と稱せられてゐる。桃の外梨、苹果、枇杷、榲桲にも害を加

へるものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、袋掛を行ふのが最も有効の方法である。毒劑の使用も有効であるが、袋掛を廢すると云ふ迄には、研究が進むで居ない。此外樹を軽く叩いて、落下したものを拾ふこと、落果の處分、冬耕等を適宜に行はなければならぬ。尙成虫の發生期に、雜草、塵芥等を燻煙すれば、此害虫が來ることが少ないものである。

其他の害虫

以上は桃の害虫として、主なるものであるが、此の外枝幹を害するものに『こすかし』*Synanthedon hector* L., 『うぶももが』*Hepialus signifer* W.K., 葉を害するものに『うめけむ』*Malacosoma neustria* L., 『かれはが』*Gastropacha generifolia* Esp., 『もんぢんめ』*Sm-rinthus Gaschekewitschii* Brem. et. Grey., 『もんのよつてんほむが』*Litho-colletis* sp., 『みのむ』*Pachytelia unicolor* Hufn., 『むぐつとむ』*Asperica orientalis* Motsch., 『もんのばぢん』*Eriocampoides* sp., 『りんごあをぞうむし』*Phyllolus argentatus* L.) があり、果物を害するもの

に「うすえぐりば」(Culicicaprina Esp.等)のものがある。之等のものは他の害虫を参照して防除すべきである。

### 第一〇 李の害虫

李の害虫は、其種類稍多いのである。併しながら固有のものは少なく、即ち次の如くである。

#### 新梢の害虫

##### 一 すもゝのあぶらむし

*Aphis* sp.

此害虫は、幼虫成虫共に、主として新梢に群生して害を加へるものであるが、又果梗及び幼果の面にも着生して害を加へる。無翅の雌は肥大であつて體長六

第十九 圖



すもゝのあぶらむし

(著者原圖)

厘餘、全體暗褐色であつて、且つ白粉を少しく装ふて居る。有翅の雌は稍、細形であつて、二對の翅は透明である。幼虫は小形であるのみ、無翅の雌と大差は無い。經過は一年十數回であつて一定せず、常に無翅の雌に依つて、幼虫が胎生せられ、又小數は有翅の雌に依つて、他に飛行して胎生せられる。冬は幼虫を以て

越冬するものであらうが未だ判然としない。李の外、杏、梅にも害を加へるものである。

#### 驅除豫防法

驅除豫防法は、他の蚜虫類と同様、石油乳劑ならば三十倍、除虫菊加用石油乳劑ならば、四五十倍液を、噴霧器を以て灌注するが宜しい。此外に石鹼合劑、除虫菊合劑等もあるのであるが、體面に白粉を装ふて、藥液の附着を妨

げて居るのであるが故に、効力が十分では無い。尙ほ青酸瓦斯の燻蒸を行へるならば、それは最も有効であり、又他の蚜虫類も同様、萃樹の綿蟲の部に於て述べた、益蟲があるが故に、保護する様に注意することが必要である。

### 枝幹の害虫

#### 二 たまがたかひがらむし *Lecanium kimonensis* Kuw.

此害虫の成蟲幼蟲共に枝幹に着生して害を加へて、枝を枯死せしむることがある。雌は其體圖に示してあるが如く、玉形を呈して、初めは黄褐色に褐色横線を有して居るが、少しく時日を経れば濃褐色になり、光澤を有して、硬化するに至るものである。雄は他の介殼蟲と同形、體長四厘五毛、翅の開張七厘五毛餘、頭胸部は赤褐、腹部は黄褐色である。卵は雌の體下に産まれ、楕圓形であつて、長さ一厘餘、赤褐色である。幼蟲の孵化當時は楕圓形であつて、赤褐色、觸角及び脚發達して居るのであるが、雌の成蟲となれば、固着して動かさず、雄は半透明の繭を造つて蛹となり、次に成蟲となるものである。

たまがたかひがらむし (著者原圖)



第三十九圖

經過は一年一回であつて、冬は雌の成蟲を以て送り、翌年の五月頃に産卵するものである。幼蟲は初め葉裏に着生して害を加へるもので

あるが、落葉前に枝幹に移轉するものである。

#### 驅除豫防法

驅除豫防法は圖の如く着生して居るものであるが故に、剪定して、焼却するが宜しい。尙此成蟲の皮膚の硬化しない間、又幼蟲の時代に於て石油乳劑の十五倍位のものゝを灌注するが宜しい。此外青酸瓦斯の燻蒸を行ひ得れば、最も有効である。尙此害虫は、李の外に、黒梅もとき、梨、萃樹等に來ることがある。

#### 三 くはのかひがらむし *Diaspis pentagona* Tayl.

枝及び幹に着生する普通の介殼蟲である。梅の害虫を参照して貰ひたい。



### 葉の害虫

四 ひめこがね *Popilia japonica* Motsch.

成蟲が葉を喰害することが甚しい。葡萄の害虫を参照して貰ひたい。

五 ぼうがねぶんぶん *Eriochloris cuprea* Hope.

成蟲は前種同様葉を喰害することが甚しいものである。葡萄の害虫を参照して、研究して頂きたい。

### 果物の害虫

六 も、のしんくひ *Diachrocois punctiferalis* Guén.

幼蟲は果物内を喰害するものであつて、鹿兒島縣下に於ては米桃に大害がある。桃の害虫を参照して貰ひたい。

七 も、のひめしんくひ *Carpina* Sasaki Mats.

幼蟲が果物内を喰害するものであつて、新潟縣下に於ては殊に甚しく、之が爲

めに、李の栽培を廢せんとして居る。桃の害虫を参照して貰ひたい。

### 其他の害虫

以上は主なる李の害虫であるが、此の外葉を喰害するものに『ひめやまの』  
(*Saturnia Baidavalli* Ev.『おんけむ』)『Porthesia similis Fuess.』『ちばつばめ』(*Elysna West-woodi* Vell.等の害がある。

### 第一一 櫻桃の害虫

#### 幹の害虫

一 こすかしば *Synanthedon hector* L.

此害虫の幼蟲は、皮下に喰入して、外部に脂と糞を漏出するものであつて、普通

に居る害虫では無いのであるが、時々蝕入して害を加へるものである。成虫はこすかしば、(深谷氏原圖)



一、幼虫  
二、成虫  
三、蛹殻

小形の蛾であつて體長四五分、翅の開張九分乃至一寸、體は黒色、前翅は、内部は透明、外部は黒色、中央に黒紋があると、後翅は全く透明である。卵は卵形暗黄色、一粒宛皮上に産み、幼虫の生長したものは長さ七八分に達し、頭部は赤褐、胴部は淡黄色、背線は赤色であつて、全體に細毛を粗生して居る。蛹は長く四五分

全體赤褐色である。經過は一年一回であつて、冬は幼虫を以て送り、六七月頃蛹となり、七八月頃に成虫となるものである。櫻桃の外桃、萃樹等にも害することがある。

驅除豫防法

驅除豫防法は、被害部は、樹脂を虫糞を漏出して明かであるが故に、小刀を以て梳り取り、幼虫を捕殺するが宜しい。尙幼虫が深く入つて居る場合には、天牛の幼虫と同様、揮發油、石油、除虫菊粉等を注入又は詰め込むが宜し

葉の害虫

二 うめけむし

*Malacosoma neustria* L.

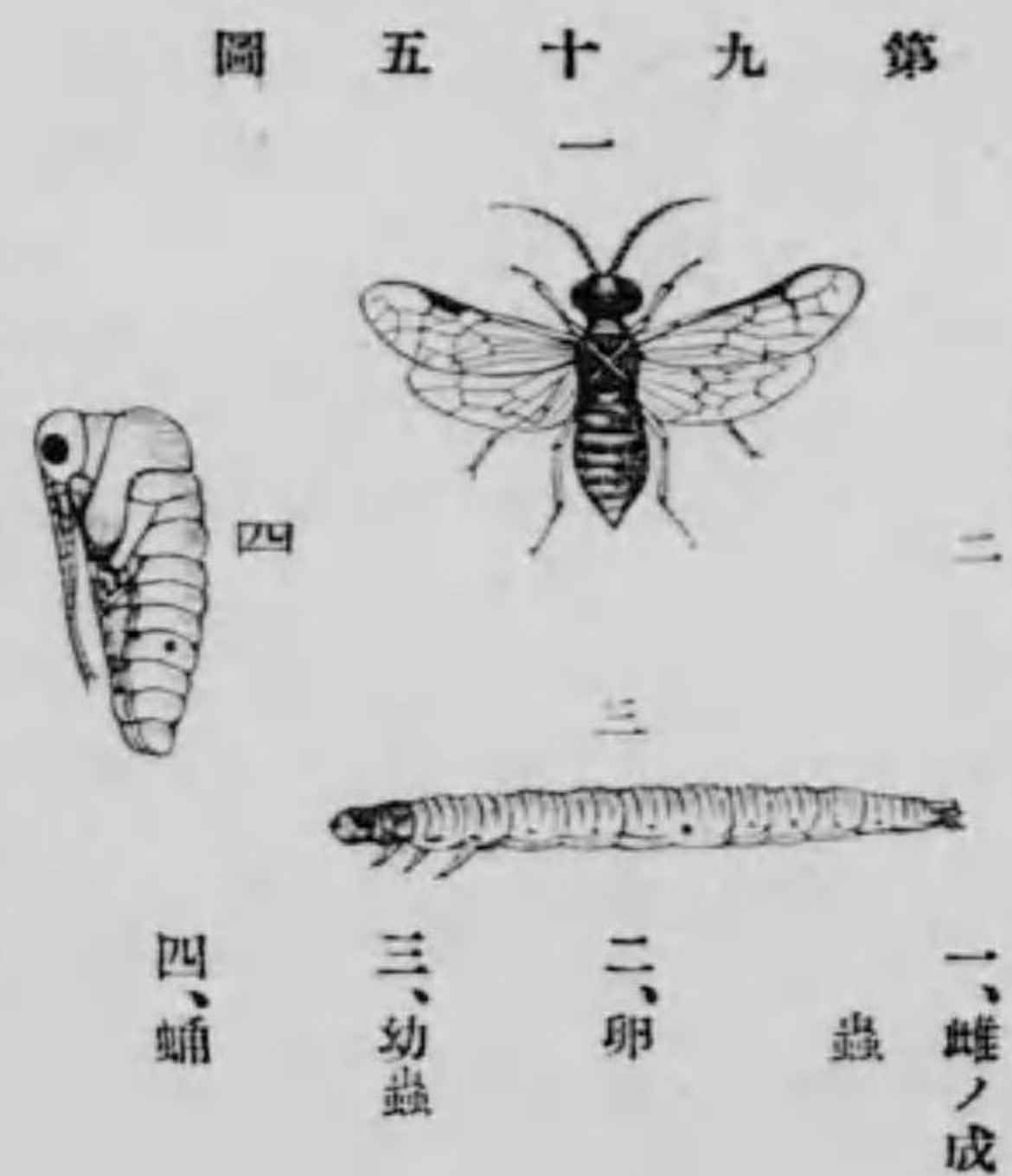
此害虫の幼虫は、梅、桃、梨等を喰害すると同様、櫻桃の葉を喰害して、全く無くすることが、珍らしくは無い。梅の害虫に述べてあるが故に、それを参照して貰ひたい。

三 をうとうはばち

*Lyda nigricans* Mats.

此害虫の幼虫は、七月頃葉に糸を吐き、巢の如くにして、其中に群生しながら、葉を喰害するものであつて、青森縣下に害が稍、多いと稱せられて居る。成虫は體長三分四五厘、翅の開張六七分、體は黒色に黄斑を混じて居る。卵は長楕圓形黄色であつて、長さ四厘餘、四五列に不規則に列べて産む。幼虫は生長したものは體長一寸二分餘、頭は黒色、胴は淡黒色であつて、三對の胸脚のみ、他は退化して居る。蛹は地中に入り、長さ三分四五厘、全體黄色である。經過は一年一回であつ

をうとうはゞち(放大圖)



(青森縣農事試驗場報告)

て、冬は幼蟲を以て地中に送り、翌春蛹となつて、五六月頃成蟲となるものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、被害の局部に止まつて居る場合には、枝と共に刈取つて焼却するが宜しい。又年々被害の大なるの地方に於ては、毒劑の使用が有効である。此の外豫防法として、冬期果樹園を耕起して、幼蟲を寒氣に露らすことが必要である。又成蟲は、除蟲菊劑に對して弱いのであるが故に之を灌注することが有効である。

四 なしのおほはゞち *Cimlex nonwae* Marl.

此害蟲の幼蟲は、葉を喰害するものであつて、山形縣莊内地方には、可なりの被害がある。梨の害蟲を参照して貰ひたい。

果物の害蟲

五 をうとうみばへ *Rhagoletis* sp.

此害蟲の幼蟲は、果物を喰害するものであつて、東北及北海道に害が多いと稱せられて居る。成蟲は小形の蠅であつて、體長一分五厘、體は黒色であるが、頭胸の兩側及脚の一部黄色を呈して居り、翅は透明であつて、黒斑を附して居る。卵は楕圓形であつて長さ四厘、黄色である。幼蟲の生長したものは、長さ三分内外、乳白色である。蛹は土中に入り、灰褐色であつて、俵狀、長さ一分五厘餘ある。經過は一年一回であつて、冬は蛹を以て送り、六月頃成蟲となつて、果物に卵を一粒づつ産む。此の卵より生れた幼蟲は、果物の内部を喰害して、變色遂に落下せしむるに至るものである。此の類には、尙一種青森縣下に害の大なるものがあるが、更に研究の上述べやうと思ふ。

驅除豫防法

驅除豫防法は、被害果の摘採、落果の焼却等は勿論、毒劑の使用も講究すべきものであらうと考へられる。尙冬季の耕鋤も必要である。

其他の害虫

以上は主なる害虫であるが、此の外に枝幹に着生するものに『くはのかひがらむし』*Diaspis pentagona* (Tang.) があり。葉を害するものに『きんけむし』*Parthesia similis* (Fuess.) 『とうかねぶんぶん』*Euclyptus cuprea* (Hope) 等がある。

第二二 棗なつめの害虫

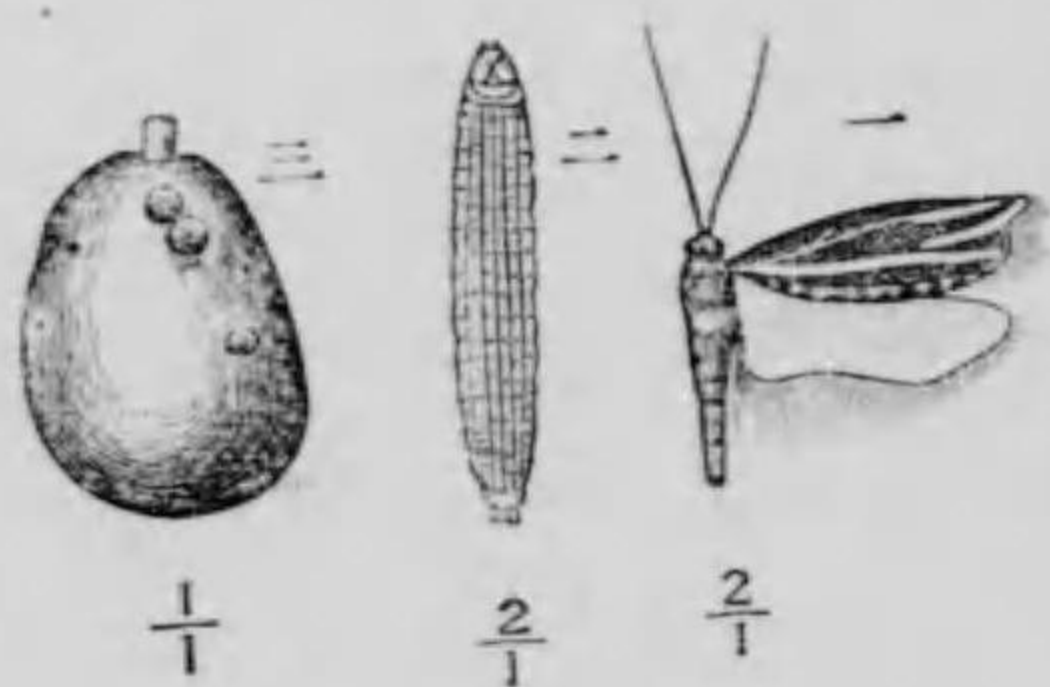
棗の害虫は、果物を喰害するものがある位であつて、其他は甚だ少ない。

果物の害虫

一 なつめのみむし 學名未詳

此害虫の幼虫は、八九月頃、棗の果物内を喰害するものであつて、其害は稍多い

第九十 六 圖



(佐々木博士原圖)

一、成虫  
二、幼虫  
三、被害果物

方である。成虫は小形の蛾であつて、體長二分、翅の開張五分餘、全體灰褐色であるが、前翅に二條の白線があり、後翅は稍灰白色である。幼虫の生長したものは、長さ三四分に達し、頭部は淡灰褐色、胴部は淡灰綠色であつて、各節に小點があり、之より細毛を生じて居る。蛹は皮の裂け目、老皮の下等に入つて化し、長さ二分餘、淡褐色である。経過は未だ不明であるが、冬は蛹を以て送り、翌春成虫となるものである。卵は何處に産まれるか判然としない。幼虫は果物内に喰ひ入り、爲めに果物は初め黄色、次に灰褐色に變じて、落下するに至るものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、果物は他の果樹に比較して多數結果するものであるが故に、幼虫の他果に移轉しない間に、被害果を摘採して、幼虫と共に肥料溜に入れるか、又は焼却するが宜しい。毒劑の應用も良からうと考へられるけれども、未だ實驗上の成績がない。

其他の害虫

以上は主なる害虫であるが、此外『ベにかみきり』(Purpuriceus Tenmickii Gnén.)の幼虫、即ち鐵砲虫が枝幹に喰ひ入て害を加へることがある外に葉捲虫の一種が發生して害を加へることがある。

第二三 葡萄の害虫

葡萄の害虫は、其種類稍多く、被害も亦大なるものがある。根の害虫、枝の害虫、葉の害虫、果物の害虫等に區別して述べて見やう。

根の害虫

一 ふひろきせら Phylloxera vastatrix Plan.

第九十七圖

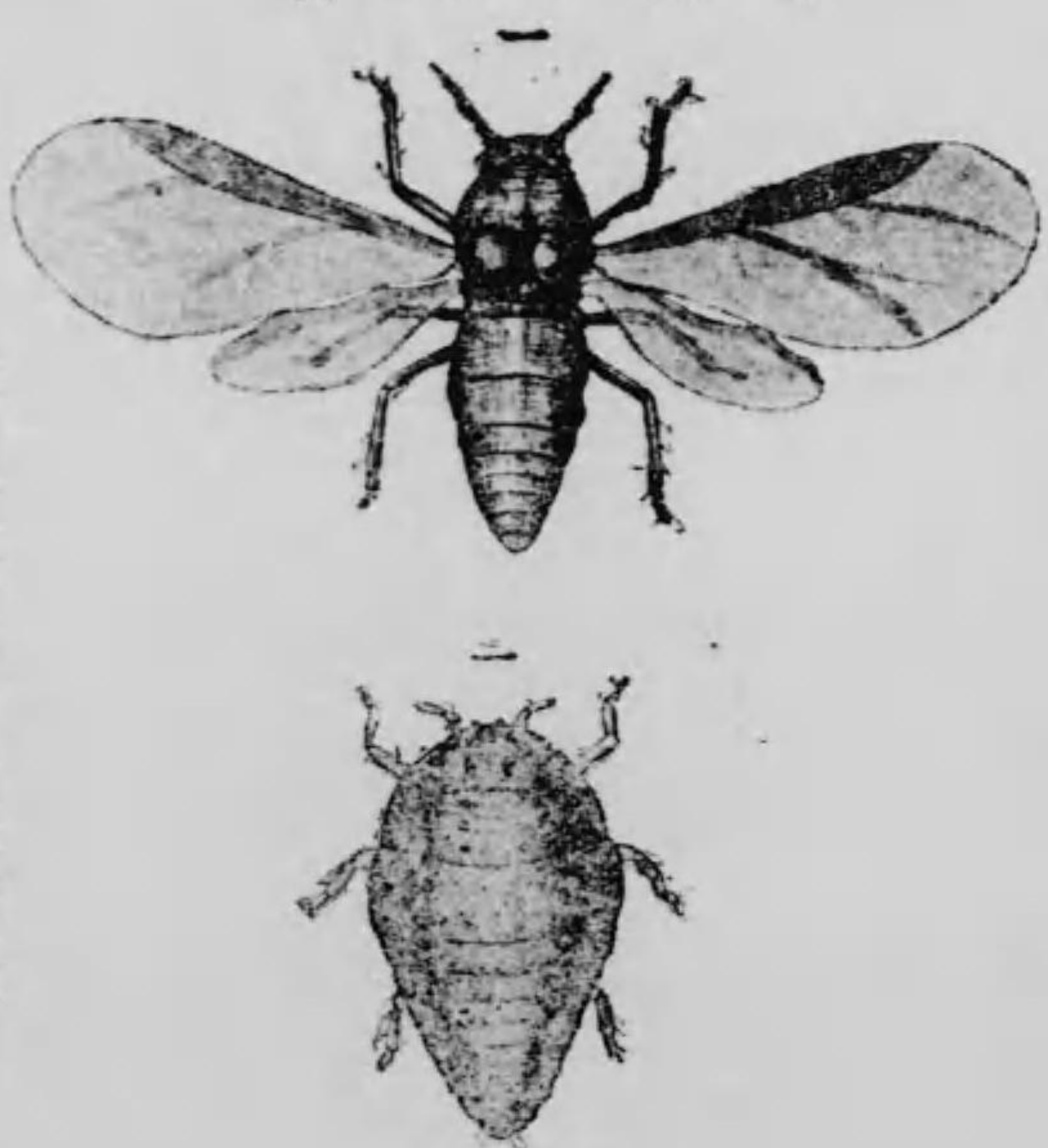


(著者原圖)

居る様であるが故に警戒を要すべきものである。

無翅の雌は體長三四厘全體暗黄色又は黄褐色であつて、觸角脚は短かく、體の背面各節に小瘤狀物を具へて居り、有翅の雌蟲及び雄蟲は稍、小形であつて、翅は透明體は稍、赤褐色である。卵は楕圓形であつて長さ一厘餘、黄色又は暗黄色を呈して居る。幼蟲は體稍、長形であつて、體の割合に觸角及び脚が長く、他は成蟲

第九十八圖



一、有翅の成虫 二、無翅の成虫

と大差は無い。経過は一年數回であつて、今日の所、吾國に於ては十分に研究されて居ない。即ち冬は根に着生せる成虫と幼虫及び卵を以て送り、翌春に至つて多く蕃殖して、細根に着生して

瘤を生せしむるものである。卵は十日内外を以て生れ、幼虫は三四週間を以て成虫となる。斯の如く根に害を加へて、六七月頃に至れば、地上に出で來つて、葉裏に着生して、瘤即ち蟲嬰を造る。葉は此の蟲嬰の爲めに、早く枯れて落下するものである。此の蟲嬰の中に生長した幼虫は、成虫となつて地下に下つて、前の如く卵を産み、又は幼虫となつて越年する

ものである。此の害虫の根に寄生して、圖の如く瘤が出来れば、葡萄は萎縮して伸長せず、又結果を見ることが無い。

驅除豫防法

驅除豫防法は、冬季掘り取つて青酸瓦斯の燻蒸を行ふが宜しい。但し大木に行ふことは困難であるが故に、成るべく小さい間に、殊に苗木は、十分注意して被害の無いものを栽植しなければならぬ。外國に於ては、二硫化炭素を地中に注入する方法を行ふて居るのであるが、吾が國に於ては未だ實驗上の成績がなく、將來の研究に俟たなければならぬ。尙被害の甚しい場合は、全然焼却するが安全である。此外吾國在來種及び米國種を砧木にすれば、此害に犯されることが比較的少ないのである。

枝の害虫

二 ぶだうすかしば

*Sciapton regale* Butte.

此害虫の幼虫は、俗に螟虫又は髓虫と呼ばれ、髓内を喰害して、それより先端を枯死せしむるものであつて、又鐵砲虫とも稱せられることもある。成虫は蜂に

第九十圖



一、成蟲 二、幼蟲の髓内に入れるもの

驅除豫防法

驅除豫防法は、冬季剪定の際、注意して此幼蟲の入つた枝を除

似た中形の蛾であつて、體長五分、翅の開張一寸内外、全體黒色であつて、後翅は透明、腹部の背面に黄色の帯がある。卵は球形であつて、點々皮面に産まれ、幼蟲の生長したものは體長一寸餘、頭部は赤褐、胴部は淡黄褐色であつて、細毛を粗生して居る。蛹は長さ五分餘、莖の中に化する。經過は一年一回であつて、冬は幼蟲を以て送り、六月頃に成蟲となつて、産卵するものである。幼蟲は其の年に出た軟梢の髓内に喰ひ入り、内部を喰害するが故に、加害部より先端は萎凋する。是より幼蟲は、順次元の方に喰ひ入つて、冬を送るものである。成蟲は運動甚だ活潑であり、其の形甚だ蜂に似て居るものである。

第一三 葡萄の害虫

ぶどうすかしば 著者原圖

第一百圖



一、成蟲(自然大) 二、幼蟲冬季潜伏の場所(皮下) 三、幼蟲の加害の爲切斷せる部分

いて焼却するが宜しい。又六月より七月頃に新梢の先端萎れ、且黒變せるものがあるのは、其部に幼蟲が居るのであるが故に、全然剪除しなければならぬ。

三 ぶどうすかしば

*Xylotrechus pyroderus* Bat.

此害虫の幼蟲も、前種同様髓内を喰害するのである。併しながら、前者は只髓内を太き孔を穿つて喰ひ歩くのみであるけれども、此の幼蟲は、孔が小形であり且つ生長の後に莖を横に喰ひ廻して、五月頃に圖の如く容易に切斷するものである。成蟲は小形の天牛であつて、體長四分、頭部は黒色、胸部は暗赤褐色、翅鞘は黒色であつて、二本の黄色の斜線がある。

第一三 葡萄の害虫

る。幼虫の生長したものは體長三分餘、頭部は褐色、胸部は乳白色であつて、脚を欠いて居る。此の脚の無い事丈けでも、前者と區別することが出来る。即ち前者は胸脚三對、腹脚四對、尾脚一對を有して居る。經過は一年に一回の如く、冬は髓内に幼虫を以て送り、圖の如く加害して六月頃蛹となり、次に七月頃より成虫となる。卵は一粒つゝ皮下に産まれ、幼虫の害は前種より大である。又前種と共に野生の葡萄にも生活するものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、面倒ではあるが、冬季に於て節に近く老皮を剥げば、其下に幼虫が居るが故に、小刀を以て梳り取るが宜しい。此外害虫の有無に係らず、毎年剥皮を行ふことが必要であり、且つ被害の多い地方に於ては、豫備枝を残して整枝上に備へなければならぬ。

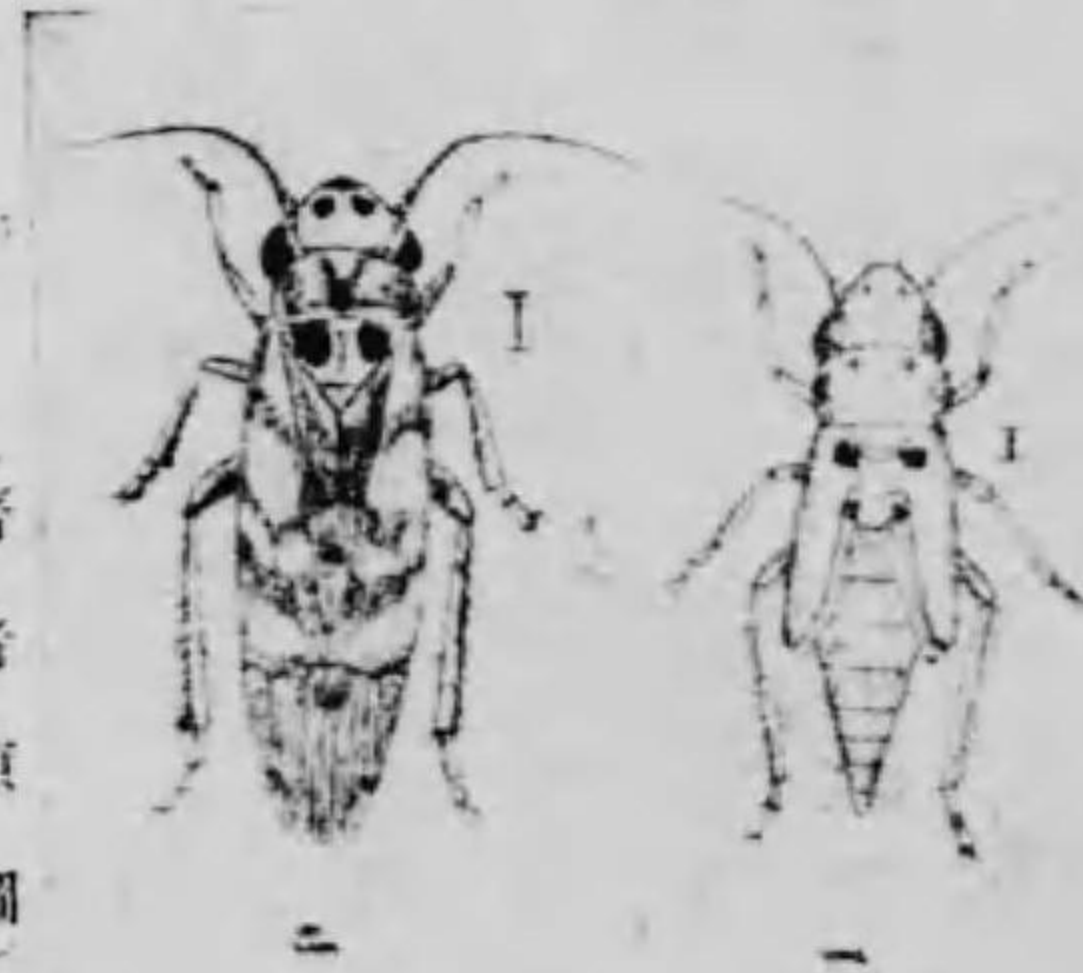
葉の害虫

四 ぶどうよこばい

*Zigina apicalis* Mats.

此害虫は、幼虫成虫共に葉裏に群生して汁液を吸収し、表面より見るも、蒼白色

第一百一圖



(著者原圖)

となつて明かであり、早くより枯凋落下するものであつて、全国各地に發生するものである。成虫は小形の浮塵子であつて、體長七八厘、淡綠色であつて、前頭及楯板に二個の黒紋があり、且翅上に判然としない紋がある。幼虫は翅を有せず、ぶどうよこばい

一、幼虫

二、成虫

長形であつて淡黄、眼のみ紅淡である。卵は楕圓形であつて長さ二厘、淡黄色であつて一粒づゝ葉脈に産む。經過は一年三四回であつて一定せず、冬は成虫を以て越年し、八九月頃最も多く蕃殖をする。成虫の多く發生した時は、粉を散らした如くに飛び散るものあり、葉の表面より見ても、被害の爲め蒼白色の小點があつて、直ちに此害虫の害たるを知ることが出来る。

驅除豫防法

驅除豫防法は、幼虫時代に除虫菊加用石油乳劑の三四十倍液を、注意して葉の裏面より灌注しなければならぬ。成虫になれば、飛散して十分



の驅除を行ふことが出来ない。尙蔭地、風通しの不良の場所、殊に箱庭の内等に多く發生するが故に、注意しなければならぬ。

五 ぶどうすかしくろは *Illioeris tennis* Butl.

此害虫の幼蟲は、葡萄の新葉及芽を喰害するものであつて、近時東京附近に、其ぶどうすかしくろは



一、成蟲  
二、幼蟲  
三、蛹  
四、加害の狀

『まさきすかしくろは』あをはだくろうすば』等の名稱がある。卵は扁平楕圓形、長さ二厘餘、初めは乳白色であるが、次第に淡褐色に變ずる。幼蟲の十分生長したものは長さ七分内外、全體淡褐色又は淡黄綠色であつて、各節に疣を有し、それ

(農事試験場報告)

より細毛を生じて居ることと、又此の疣を通ずる黄色の四縦線がある。蛹は暗褐色の粗繭に入り、長さ四分五厘餘、褐色である。經過は一年一回であつて、冬は老熟せる幼蟲が、根元に下つて、繭に入つて送り、翌年五月頃成蟲となる。それより産卵して生れ出た幼蟲は、心葉を主として、裏面に居つて害を加へ、孔を穿つものであるが故に、直ちに此害虫の被害であると云ふことが知れる。

驅除豫防法

驅除豫防法は、冬季根際の際を尋ねて、それを處分すること。幼蟲が多く發生したならば、除蟲菊加用石油乳劑の三十倍液、又は除蟲菊石鹼合劑を灌注することが必要であり、尙毒劑の應用も面白からうと考へられる。

六 びろうごすゞめ *Rhagoletis mongliana* Butl.

此害虫の幼蟲は、葉を喰害するものであるが、多數發生するものには無い。只幼蟲が大形であるが故に、一匹でも其食害は少なくない。成蟲は小形の天蛾であつて、體長一寸、翅の開張二寸内外、全體帶緑黒褐色であつて、前翅に横帯がある。全體の色が天鷲様であるが故に、此名がある。卵は楕圓形淡綠色、葉上に點々産まれる。幼蟲の十分生長したものは、體長三寸内外に達し、全體淡綠色又は淡

びろいどすゞめ 佐々木博士原圖



一、成虫 二、幼虫

黒褐色の二様であつて眼状紋及び側面に斜状灰白線等がある。蛹は長さ一寸内外、帯緑黄褐色であつて、小點を密布して居る。經過は一年一回であつて、蛹を以て冬を送り、幼虫は七月頃より出で、害を加へる。蛹は地下一二寸の所に入るものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、多數發生するものでは無いので、故に、被害部を調べて一々幼虫を捕殺するが宜しい。

七 ぶどうきんさるむし

*Acyrothium gashkewitshi* Motsch.

此害虫は、成虫が葉を食害するものであつて、各地に發生するものでは無い様であるが、新潟及長野縣下等に其害が大である。成虫は葉蟲としては大形の方であつて、體長二分八厘、全體青藍色であるが、殊に翅鞘の中央部赤銅色を呈して美麗である。卵は楕圓形であつて長さ四厘餘、黄色であつて、葉上又は落葉等に不規則に産む。幼虫の十分生長したものは、體長四分餘に達し、頭部は黄褐白、胴

部は淡白色であつて細毛を生じて居る。蛹は長さ二分五厘餘、全體黄色であり、きんさるむし雌雄 經過は一年一回であつて、冬は叢の間に成虫を以て送り、六月頃に出で産卵をする。此の卵より生れ出た幼虫は、地中に入つて、根を喰害するものであるが、大害は無い様である。



(著者原圖)

驅除豫防法

驅除豫防法は、早朝運動の不活潑の間に下に廣き布を敷き、それに拂ひ落して、油水に入れるか、或は熱湯に入れて殺すが宜しい。又毒劑を使用すれば此害虫が来る

ことが無く、若し來つて喰害すれば斃れるものである。只此毒劑は心葉の伸張毎に時々施行するの必要がある。

八 ひめこがね

*Anomala rufocuprea* Motsch.

此害虫は、前種同様成虫が葉を喰害するものであつて、其害少くは無い。成虫は體長四五分、丸形であつて、雌は黒綠色、雄は少しく小形であつて、青藍色が普通である。幼虫は俗に『つぼむし』又は『いもむし』等と呼ばれ、大豆其他の根を喰害するものである。經過は一年一回であつて、成虫は毎年六七月頃より出

第五百五圖



(著者原圖)

第一三 葡萄の害虫

ひめこがね加害の葉

二二八

で、冬は幼蟲を以て土中に送り、翌春蛹となるものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、前種

に準じて行ふべきである。尙此外に、此害虫は多く夜間に參集するものであるが故に、雜草塵芥等を燻烟すれば、來ることが少なく、又豫防劑として、稀薄の石灰水を散布して有効であるとの話もあるが、著者は未だ實驗したことが無い。

九 まめこがね

*Popilia japonica* Motsch.

此害虫も、前種同様成蟲が葉を喰害するものであるが、其害した有様が、前

第六百六圖



(著者原圖)

まめこがね加害の圖

此害虫の成蟲も、葉に群生して大害を加へ、若し果物に袋掛けをしなかつたならば、果物をも喰害する頑強なる害虫である。成蟲は體長八分餘、全體青銅色を呈し、幼蟲は地中に生活して、十分生長すれば長さ一寸二三分に達し、頭部は褐色、胴部は乳白色であつて、尾節に至るに従つて太まり、皮膚を通して黒色の内臓を透視することか出来る。蛹は普通耕地、即ち鍬の入る畑を去て、畦又は道路の地

第一三 葡萄の害虫

二二九

種は稍太き孔を穿つのであるが、此種は多くは葉の中央に、小孔を無數に穿つて害するものである。成蟲は小形であつて、體長三分内外、扁平大體綠色であるが、翅の中央赤褐色を呈して居る。經過其他前種と大差は無い。

驅除豫防法亦前種に準すべきである。

一〇 こうがねぶんぶん

*Euclyptus cuprea* Hope.

第七百七十七号



一、成虫 二、被害果物

第一三三 葡萄の害虫

下に入り、窩を造つて其中に、褐色の薄い繭を造り、體は黄褐色である。經過は一年一回であつて、窩に入つた幼蟲を以つて送り、翌春蛹になる。成蟲は毎年七月頃より出で、葡萄の葉の脈のみを残して喰ひ去り、且つ樹枝上に黒色の糞をたれて甚だ汚ない。葡萄の外、李、棗樹、其他各種の樹木を害するものである。幼蟲は地下にあつて、各種の作物の根を喰害するものである。卵は、成蟲が土塊の下に潜んで、一粒宛産み、長味を帯べる球形であつて、長さ一分餘、初は乳白色であるが、次に黄色に變ずる。

驅除豫防法は前種に準じて宜しい。

第八百八十八号



(著者原圖)

果物の害虫

一一 ぶどうとりは *Stenopilia vitata* Tasaki.

此害虫の幼蟲は、果物の内部及花を喰害するものである。成蟲は小形の蛾であつて、體長二分五厘、翅の開張六分内外、全多いものである。成蟲は小形の蛾であつて、體長二分五厘、翅の開張六分内外、全體灰褐色であつて、前翅は二條、後翅は三條にして分れて居る。蛾としては、鳥羽蛾の類に屬するものであつて、一寸珍らしいものである。幼蟲は、十分生長すれば體長五六分に達し、頭部は淡褐色、胴部は綠色であつて、無紋のものもあるが、多く背面の兩側に、黒條又は黒紋を列べて居る。蛹は淡灰綠色であつて、葉の裏面の色に異ならず、長さ二分五厘餘ある。經過は一年二回であるが、冬は何を以てするか又卵は不明である。第一回の幼蟲は、葡萄の開花期に發生して花及び蕾を喰ひ、第二回は七月頃より果物内に喰ひ入つて大害を加へる。即ち

成虫は第一回は五月、第二回は八九月頃に出るものであつて、蛹は第一回は葉の裏面に尾端を以て垂がり、第二回は果物の中に化すものである。將來葡萄の害虫として恐るべきものであらうと考へられる。

驅除豫防法

驅除豫防法は、第一回の即ち花蕾を喰害するものに對しては、早くより毒劑を使用すべく、第二回のものには袋掛を行へば十分に防ぐことが出来る。

一二 あげびのこのはが *Ophideres tyrannus* Guén.

一三 あかえぐりは *Calpe excavata* Bull.

以上二種共に、成虫が果物を害するものである。桃の害虫に述べてあるが故に其部を参照して貰ひたい。

其他の害虫

以上は葡萄の害虫として主なるものであるが、尙此外に葉を喰害するものに『てんとうせみめ』 (*Desmia* sp.) 『いすゞめ』 (*Theretara japonica* Orza) 『くるますゞめ』

(*Ampelophaga rubiginosa* Brem et Gray) 『かなぶん』 (*Rhomborrhina japonica* Hope) 果物を害するものに『うするぐりば』 (*Calpe capucina* Esp.) 等が発生して害を加へることがある。他の害虫を参照して防除すべきである。

第一四 無花果の害虫

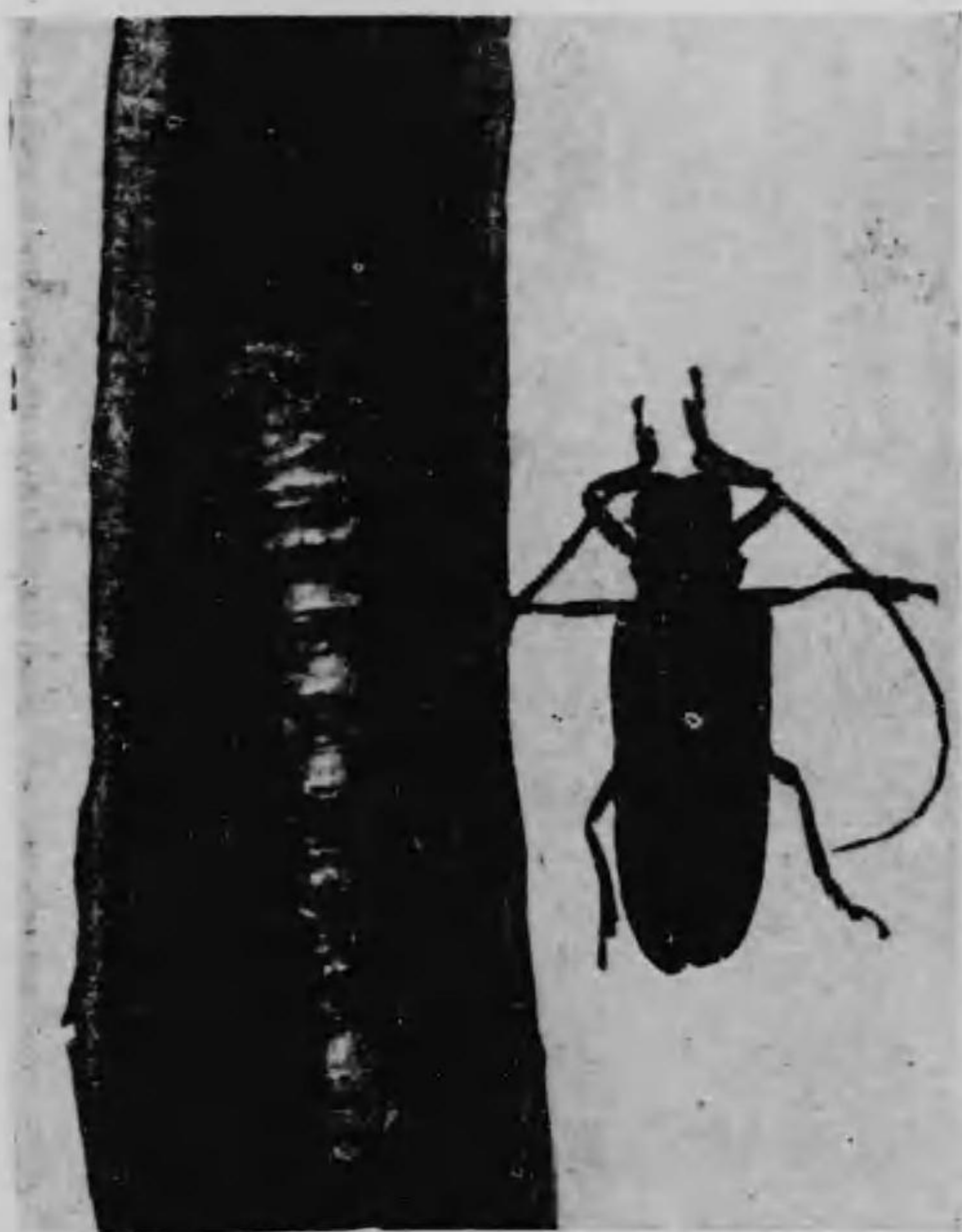
無花果の害虫は、其種類も被害も、共に大なるものが少ない。即ち次の如くである。

枝幹の害虫

一 くはかみきり *Aporiona rugicollis* Chev.

此害虫は、桑樹の害虫であるが、無花果を害することも、決して桑樹に譲らない。成虫は稍大形の天牛であつて、體長一寸五分、雄は稍小形であり、全體黃褐色又は

第 百 九 圖



(著者原圖)

所より外部に孔を穿つて、糞を出すものである。

灰褐色であつて、桑樹及び無花果樹の皮に似て居る。卵は楕圓形であつて白色、長さ七八厘、幼蟲は十分生長すれば二寸餘に達し、頭部は小形であつて褐色、胴部は赤味を帯べる乳白色である。蛹は孔内に化し、長さ一寸五分餘、又乳白色である。  
經過は二年に一回であつて、冬は幼蟲を以て送り、翌春蛹になる。成蟲は毎年七八月頃より出でて皮を噛み、一粒づつ、卵を産み入れる。幼蟲は材部の上下左右自在に喰ひ廻して、各

第一四 無花果の害蟲

二三四

くはかみきり成蟲及幼蟲

驅除豫防法

驅除豫防法は、新しい糞の出る孔を少しく太め、それに除蟲菊粉を油に固めたもの、又は青酸加里等を填充して、其の上を泥土を以て塞ぎ置くにある。此の方法を二三回行へば、大抵は防ぎ得られる。尙此外に、孔より石油乳劑、又は二硫化炭素、或は揮發油を注入する方法もあるが、深く入つて居るも、及び二硫化炭素の使用は、一寸不便の嫌がある。又百分根を填充するを、有効であるとの實驗家の説もあるが、著者未だ實驗したことが無い。故に之等は、各自先づ少しづつ、實驗の上に廣く應用せられんことを、望むものである。

果物の害蟲

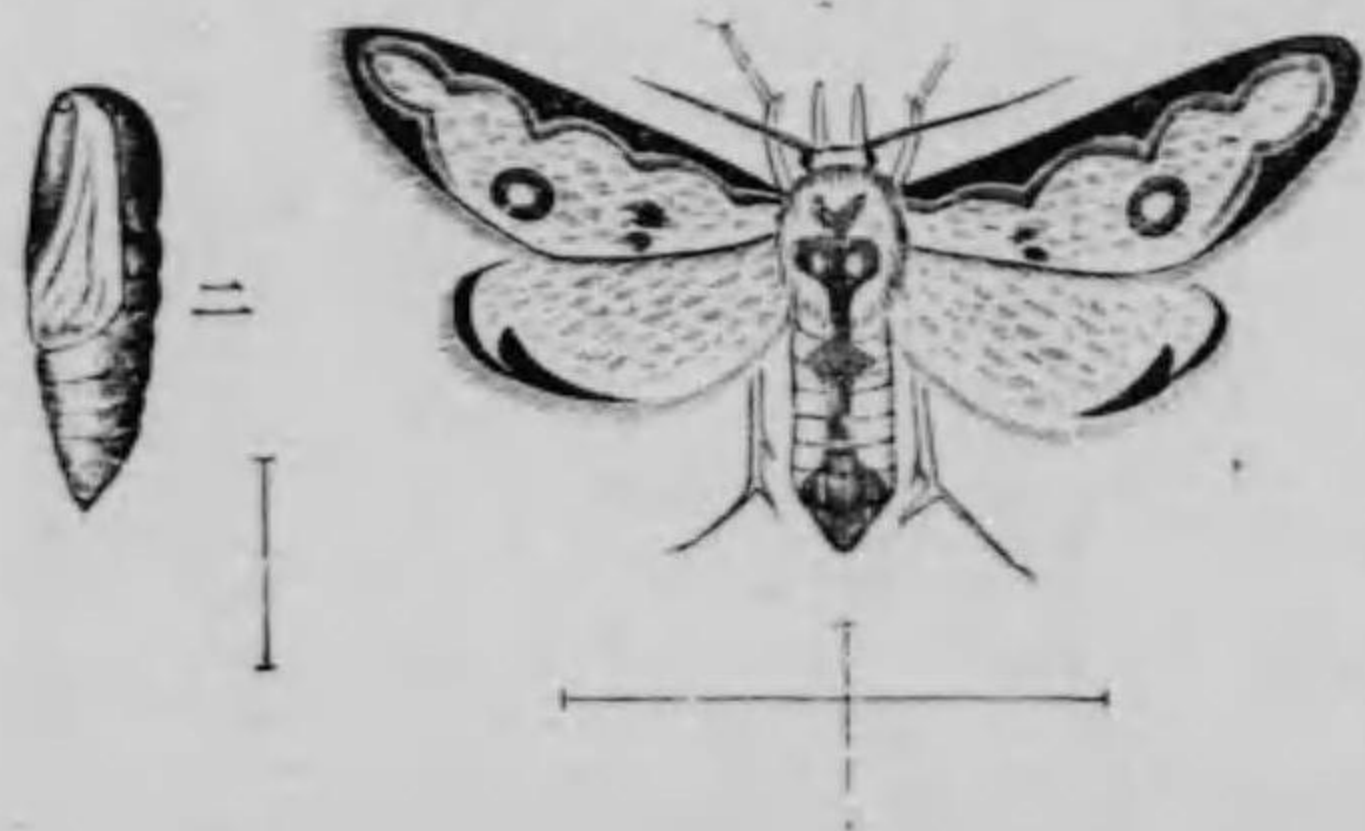
二 いちぢくののみむし *Cirrhochrestes bryovialis* Walk.

此害蟲は、『もんきおほめいが』とも呼ばれ、幼蟲が果物の内部を喰害するもので、熊本地方に害が多いと云ふことである。成蟲は小形の蛾であつて、體長二分五厘、翅の開張七分内外、全體灰白であるが、前翅の前縁及び外縁に黄褐色の圓紋と點紋とがあり、又後翅には外縁に二條の黒帯がある。幼蟲の十分生長した

第一四 無花果の害蟲

二二五

第一百十圖



一、成蟲 二、蛹

いちごのみむし (小島氏原圖)

第一四 無花果の害虫

ものは長さ三四分、頭部は黄褐色、胴部は暗黄色、各節に淡黒色の小點を有して、それより細毛を生じて居る。蛹は幼蟲と同色、長さ三分餘ある。經過は一年二回であつて、冬は皮の裂け目根際等に楕圓形の繭を造つて、其中に幼蟲を以て送り、第一回の成蟲は四五月、第二回は十月頃に發生するもので、卵は未だ不明であるが、果物に點々産まれる様である。幼蟲は果物内に喰ひ入つて、褐色の蟲糞を出し、果物は爲に變色萎凋して、落下するに至るものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、被害果を摘採し

て焼却するが宜しい。若し被害の多い地方に於ては、毒劑の使用も或は袋掛の方法も應用すべき手段であると考へられる。

其他の害虫

以上は主なる害虫であるが、尙此外稀に『とびいろまるかひがらむし』(Aspidiotus ficus Ashm.)が枝幹に着生し、葉には『わたかひがらむし』(Phenacoccus pergandei Ckll.)が着生することがある。

第一五 須具利の害虫

須具利の害虫は種類少ないのであるが、被害は稍、大なるものがある。

葉の害虫

一 すぐりのあぶらむし

Myzus ribis Linn.

第一百一十圖



(著者原圖)

幼蟲は翅を缺くのみ、雌の成蟲と大差は無い。經過は一年十數回であつて一定せず、米國に於ては、冬は卵を以て越年すると云ふことであるが、吾國に於ては未

あるが、吾國に於ては今日迄明かでない。著者は福井縣下敦賀地方に於て始めて實見したのである。無翅の雌蟲は體長五厘餘、腹部肥大であつて、全帶黃綠色、複眼は紅色である。有翅の雌蟲は、無翅のものより體細長であつて、着色は同様であるが、胸背及腹背に淡黒紋がある。

第一五 須具利の害虫

此蚜蟲は、幼蟲成蟲共に心葉の裏面に群生して、養液を吸収し、圖の如く葉を卷縮せしめて、大害を加へるものである。米國に於ては古くより知られた害虫であるが、吾國に於ては今日迄

すぐりのあぶらむし加害の圖(縮小圖)

だ明かではない。將來須具利の害虫として、注目すべきものであらうと考へられる。

驅除豫防法

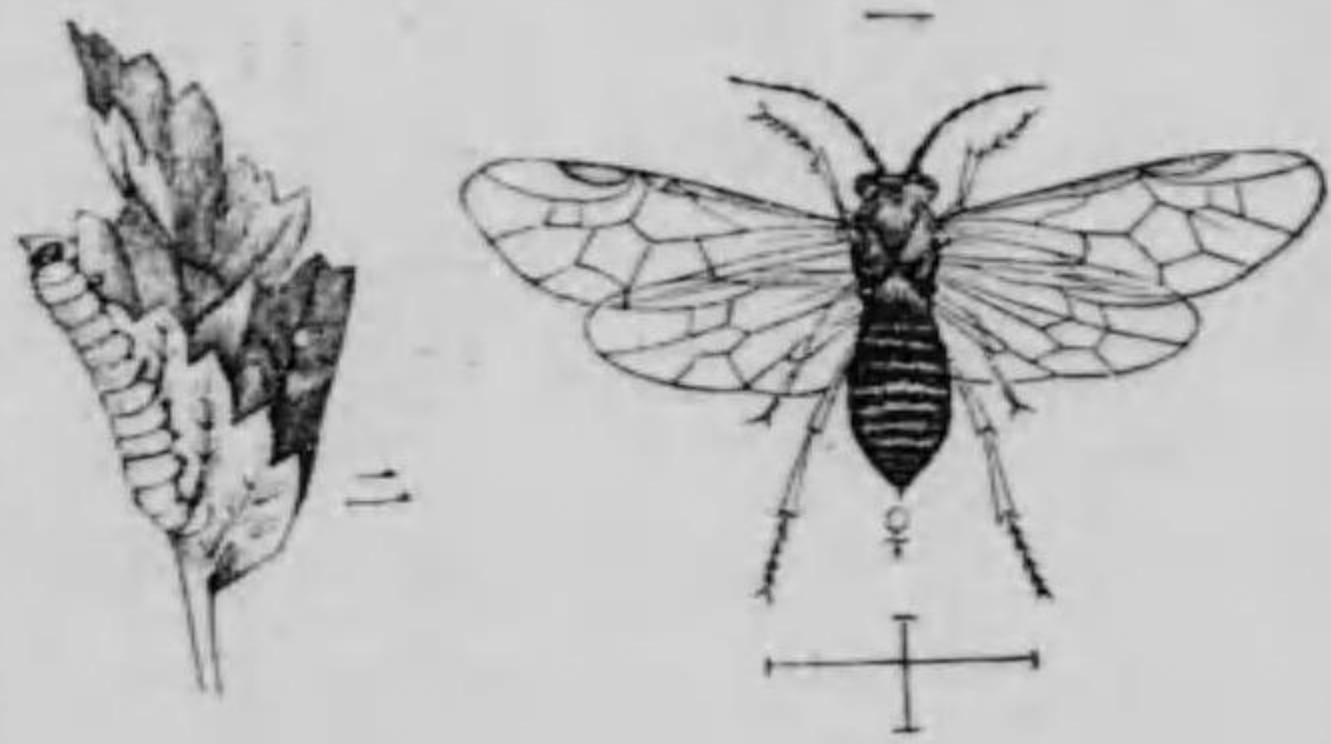
驅除豫防法は、他の蚜蟲に準じて行ふべきであるが、圖の如く既に被害のものは、枝の上部を害虫の散亂せぬ様靜かに切斷して、燒却するにある。但し此方法は、六月頃有翅の成蟲が多く出て、盛に他に飛行するものであるが故に、其以前に於てするの必要がある。灌注剤としては、害虫は比較的軟弱であるが故に、除蟲菊合劑、除蟲菊石鹼合劑で足り、除蟲菊加用石油乳劑の五六十倍液は、尙良好であり、又燻蒸籠を以て青酸瓦斯の燻蒸をすれば最も有効である。

二 すぐりはち Pristiphora grossularis Walsh.

此害虫の幼蟲は、葉を喰害するものであるが、今日の所未だ青森縣津輕地方の外に、其害を聞かない様である。成蟲は小形の蜂であつて、體長一分六七厘、翅の開張三分三厘餘、體は黒色であるが、翅は稍、暗色を帯びて居る。卵は尖つた楕圓形白色、幼蟲の生長したものは體長五分、頭部は黃褐色、胴部は綠色であつて、各節に横皺がある。蛹は長さ一分五厘餘、灰褐色又は黄色の繭に入り、經過は一年二



第 百 二 十 二 圖



一、成虫 二、幼虫

### 其他の害虫

以上は主なる須具利の害虫であるが、此外に、枝幹に着生するものに『ながくろほしかひがら』[*Parlatria protens* Curt.]『くはのかひがらむし』[*Diaspis pentagona* Targ.]葉を喰害するものに『すぐりぞうむし』[*Pseudoneorhinus bifasciatus* Roel.]『くはこまだら

### 第一五 須具利の害虫

すぐりはゞち(サンダース) 回であつて、冬は繭の中に幼虫を以て越年し、翌春蛹となるものである。成虫は、第一回は五月、第二回は九月頃に出で、卵は葉縁より葉肉内に、一粒宛産み、蛹は枝の分れ目等に繭を附け、幼虫は少しく觸れても直ちに落下するものである。

#### 驅除豫防法

驅除豫防法は、幼虫に對して、除蟲菊加用石油乳劑の三十倍液を灌注するが最も有効である。此外幼虫を拂ひ落して一々拾ひ取るも良ろしい。又蛹の繭を採取することも必要である。

ひとり』[*Spilosoma imparilis* Butl.]等が害を加へることがある。

### 第一六 栗の害虫

栗の害虫は凡て算すれば、十數種に及ぶのである。併しながら其主なるものは次の三四種に過ぎない。

#### 枝幹の害虫

##### 一 くりのくまあぶらむし *Pterochlorus* sp.

此害虫は、成虫幼虫共に枝幹殊に若木であれば、根部に近く群生して害を加へる。吾國に産する蚜虫類中、恐らく形の最も大なるものである。無翅の雌は體長一分七八厘、肥大であつて全體錯黑色、他の蚜虫に見られる排蜜管と呼ぶもの

は、瘤状に退化して居る。有翅の雄は、稍、無翅のものより細形、翅も黒色であるが、前翅に白紋がある。又有翅の雄は更に細小形である。卵は楕圓形であつて、黒色、根に近く、又は枝の上に百數十粒、不規則に一個所に集りて産む。経過は一年十數回であつて一定しない。即ち冬は卵を以て送り、早春發芽に先立つて幼虫となり、それが一週間位で成虫になる。此の成虫は、多くは無翅のものであつて、雄無く、單獨に幼虫を胎生する。有翅の雌は多く蕃殖した時代に出て來る。斯の如く胎生に依て、秋季に至るのであるが、晩秋に及べば、有翅の雄が出來て、無翅の雌と交尾産卵するものである。

**驅除豫防法** 驅除豫防法は、冬季卵の附着して居るのを、竹の「へら」の様なものを用いて、潰殺するが、良からうと思はれる。但し藥劑を使用するならば、幼虫及成虫共に、他の蚜虫と同様の方法を以てすべきである。

### 葉の害虫

#### 二 くすさん

*Caligula japonica* Moor.



くすさん成虫 (縮小)



くすさん幼虫

(縮小)

別名を「てぐすが、しらがたらう」とも呼び、幼虫が葉を喰害するものである。成虫は大形の蛾であつて、體長一寸一分、翅の開張三寸五分内外、全體灰褐色であつて、前後翅共に眼状紋と前縁より後縁に向へる數多の線がある。卵は圓

(著者原圖) 第一六 栗の害虫

(著者原圖)

筒形であつて灰褐色枝幹に不規則に産まれる。幼蟲の孵化當時は黒色であるけれども十分生長したものは體長三寸五六分に達し、頭部は黄綠色、胴部は淡綠色であつて、全體に白色の細長毛を簇生し、氣門は藍色である。蛹は褐色の粗い繭の中に入り、長さ一寸内外あつて、黄褐色である。經過は一年一回であつて、冬は卵を以て送り、幼蟲は六七月に出で、成蟲は八九月頃に發生するものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、幼蟲は大形であつて見付け易いのであるが故に、枝を叩いて振り落し、それを一々集めて、内臓の絲線を曳き延だして天狗絲を製造するが宜しい。尙卵より孵化當時は葉裏に群集し、且つ黒色であつて見付け易いのであるが故に葉と共に摘採して焼却すべきである。

果物の害蟲

三 くりのみぞうむし

*Balanus camellae* Roel.

此害蟲の幼蟲は、果物を喰害するものであつて、栗の害蟲として最も憎むべきものである。成蟲は小形の象蟲であつて、體長三分、全體灰褐色である。卵は外

第 百 十 五 圖



一、幼蟲 二、被害果物

部より一粒づゝ産み入れ、幼蟲の生長したものは體長三分餘、頭部は黒褐色であるが、胴部は乳白色であつて横皺がある。經過は一年一回であつて、冬は地中にくりみぞうむし (著者原圖) 入つて、幼蟲を以て送り、翌春蛹となり、次いで七八月頃成蟲となるものである。幼蟲は一果に一頭宛入るのが普通であるけれども、中には二頭三頭入るものがある。此の幼蟲は果物の落下と共に、地中に入るものである。

驅除豫防法

驅除豫防法は、收穫後少しく乾かして、次に二硫化炭素の燻蒸を行ふが

宜しい。斯くしても決して品質に變化が無い。此外燻蒸を行はないものには被害果を選別して焼却するか、早く食用として煮るがよい。

其他の害蟲

以上は栗の主なる害蟲であるが、此の外に幹部の材に喰ひ入る『しろすぢか

みきり』(Batocera lineolata Chev.) 『さちかみきり』(Mallanbyx japonica Bates.) 外部に着生する『はだかかひがらむし』(Monophelus complentus kuw.) 『くりのまるかひがらむし』(Tecnum takachihoi kuw.) 果物に入るものに『ものしんくひ』(Dichocrocis punctiferulis Guen.) 此外に葉には『あぶらむし』(Callipterid sp.) 『をとしぶみ』(Attelabus jekeli Roel.) 『ひめをとしぶみ』(A. montanus Roel.) 『くりしおぶらむし』(Balanus dentipes Roel.) 等が着生して害を加へることがある。

## 附 録 害 蟲 以 外 の 有 害 動 物

### 一 あかだに(赤壁蟲) Tetranychus sp.

此動物は蜘蛛類中の壁蝨類に属するものであつて、柑橘類及其他の果樹及温室内の植物、又は露地栽培の菜豆等の葉に群生して害を加へ、爲に葉は蒼白色となつて衰弱し、遂に落下せしむるに至る害の大なるものである。動物は微小であつて粟粒よりも小さく、一寸肉眼を以て見ることが難く、全體紅色である。害蟲と異なるところは四對の脚を有するにある。幼蟲は更に小形であり、卵は圓形であつて共に紅色である。一年數回の發生であつて一定せず、殊に好天乾燥の年に多く發生するものである。

### 驅除豫防法

石灰硫黄合劑の八十倍乃至百倍液を灌注して充分の効力があり、又靑酸瓦斯の夏季燻蒸として、百瓦量十五分間を以て充分である。此外濕氣を嫌ふが故に、時々水を灌注すること、及降雨の前徴があるならばその爲幾分

斃れるが故に、それを俟つて後に驅除に従事すべきである。

## 二 さびだに(銹壁蝨) *Eriophyes oleivorus* Ashm.

此壁蝨は柑橘の象皮病と稱する、即ち果皮の面が褐色又は暗褐色に變じて、硬化せしむる病害の原因となる恐るべき動物の一である。全形楔状を呈して淡黄色、體長五六毛、甚だ微小のものであつて、元より肉眼を以て見ることが出来ない。卵は球形直徑一厘餘、仔蝨は其形成長せるものと大差なく、共に淡黄色である。静岡縣下の發生の狀況に依れば、毎年七月頃より發生して、八九月頃に最も被害が多く、冬は前種と共に親壁蝨を以て越冬するものである。

### 驅除豫防法

冬期靑酸瓦斯の燻蒸及夏季に石灰硫黄合劑の「ボーマー」比重の三度内外のものを數回散布するにあるのであるが、餘程注意して行はなければ効を擧げることが出来ない。

## 三 なしのはむぐりだに(梨葉潜壁蝨) *Eriophyes pyri* Post.

此壁蝨は早春發芽と共に出で、主として西洋梨の葉に小形の隆起を造り、初めは綠色であるが、次に赤褐色となり、遂には黑色に變じて落葉せしむるものであ

る。近時各地方に被害が多くなるとして居る。壁蝨の成蟲は體長五六毛、細長形であつて、淡黄又は淡黄綠色、體上に無數の横皺を現はして居る。一年數回の發生であつて、冬は皮の傷芽の鱗片等に深く潜伏し、早春より出でて葉裏に着生して加害の爲め葉の組織が變化して瘤となるものであり、此瘤の中に卵を産み、而して次に孔を穿つて這ひ出るものである。

### 驅除豫防法

冬季に於て靑酸瓦斯の燻蒸を行ひ、又發芽の際被害の微あるものを一々摘採して焼却し、健全なる葉を出さしめなくてはならぬ。

## 四 からす(鳥) *Corvus* sp.

世人の良く知れる鳥であつて、各種の果物を喰害且つ落果せしむるものである。驅除豫防法としては空砲を放つて時々威嚇するより外に致し方が無い。

## 五 やまうさぎ(山兎) *Lepus* sp.

山兎には南部日本に産する普通のもの、北部日本に産する冬期に於て毛色の白く變ずる『もちごうさぎ』とあるので、此の何れも冬期に於て果樹の樹皮を噛み喰つて害を與へるものである。

驅 除 豫 防 法

降 雪 の 少 不 地 方 で あ つ て 作 業 に 便 利 な る 場 合 に 於 て は 冬 季 中 石 灰 硫 黄 合 劑 を 二 回 位 充 分 灌 注 す れ ば 大 抵 は 防 ぐ こ と が 出 來 る が 大 雪 の 地 方 に 於 て は 之 を 以 て 目 的 を 達 す る こ と が 出 來 ぬ。 従 來 の 實 驗 者 の 説 に 依 れ ば 棚 造 に は 應 用 が 出 來 ない け れ ど も 盃 狀 又 は 圓 錘 形 仕 立 等 の 場 合 に 於 て は 成 る べ く 枝 を 絞 ぼ り 集 め 其 周 圍 に 柴 粗 朶 を 下 方 に 向 け て 固 く 束 ね て 置 け ば 來 る こ と が 無 い と 云 ふ こ と で あ る。

果 樹 の 害 蟲 終

# 索引

第二 果樹害蟲和名索引

第一 果樹害蟲分科索引

第 一  
果 樹 害 蟲 分 科 索 引

直 翅 目

蟋 蟀 科

くだまきだまし.....155, 172

豆 娘 科

あをいとゞんぼ.....97, 110, 158

蜻 蛉 目

介 殼 蟲 科

はらんのながかひがらむし..... 141

とびいろまるかひがらむし..... 227

りんごのかきかひがらむし..... 98

るび-いろむし.....127, 136

なかだいせりやかひがらむし... 155

わたかひがらもどき.....

..... 122, 158, 227

わたふきかひがらむし..... 131

わたかひがらむし..... 134

かめのころむし.....97, 154

たまがたかひがらむし..... 196

つのろむし...97, 121, 154, 158, 165

なしのくるほしかひがらむし.....

..... 71

なしのしろながかひがらむし.....

.....72, 120, 123

くるくるほしかひがらむし..... 143

くはのかひがらむし.....

.....97, 165, 173, 197, 204, 230

くりのまるがひがらむし..... 235

やのねながかひがらむし..... 142

まるめろのまるかひがらむし... 158

こなかひがらむし..... 64

あかまるかひがらむし.....127, 137

さんほぜいかひがらむし... 67, 98, 167

ざくろのふくろかひがらむし... 162

みかんのまるかひがらむし..... 138

みかんのながかひがらむし..... 139

みかんのこなかひがらむし..... 155

ひらたかたがひがらむし..... 135

もみぢのわい.かひがらむし..... 97

粉 蝨 科

みかんのこなじらみ..... 155

蚜 蟲 科

りんごのわたむし..... 57, 99

りんごのあぶらむし.....

.....77, 108, 158

なしのみどりあぶらむし..... 78

うめをあぶらむし..... 168

くりのくまあぶらむし..... 231

ふみろきせら..... 206

ざくろのあぶらむし..... 164

みかんのあぶらむし..... 144

もゝのはまきあぶらむし..... 178

もゝのみどりあぶらむし..... 180

もゝのあぶらむし..... 180

すぐりのあぶらむし..... 227



木 蠹 科  
 なしぐらみ..... 75  
 りんごじらみ..... 107  
 浮塵子科(白蠟蟲科)  
 あをばはごるも.....97, 127, 146, 173  
 ぐんばいうんか..... 155  
 横 遣 科(浮塵子科)  
 ぶどうふたてんよこばひ..... 212  
 こみどりよこばひ..... 110  
 沫 吹 蟲 科  
 しろをびあわふき..... 161  
 盲 椿 象 科  
 りんごのめくらかめ..... 109  
 軍 配 蟲 科  
 ぐんばいむし..... 1, 111  
 椿 象 科  
 なしかめむし..... 77  
 鱗 翅 目  
 潜 葉 蛾 科  
 もゝのはむぐりむし..... 183  
 みかんのはむぐりむし..... 147  
 細 蛾 科  
 もゝのよつてんほそが..... 193  
 きんもんほそが..... 112  
 ぎんもんほそが..... 111  
 葉 捲 蛾 科  
 りんごはまき..... 120  
 りんごのひめはまき..... 120  
 もゝのはまきむし..... 281  
 つまをりはまき..... 97  
 みかんのはまきむし..... 148  
 ぶどうのはまきむし..... 222

巢 蛾 科  
 りんごのひめしんくひ..... 119  
 りんごのすむし..... 113  
 蟻 蛾 科  
 なしのしんくひ..... 91  
 もゝのしんくひ.....  
 ...93, 118, 152, 161, 164, 186, 198, 235  
 なしはまき..... 83  
 いちやくのみむし..... 225  
 實 蛾 科  
 もゝのしんたりむし.....91, 174  
 もゝのひめしんくひ.....157, 187, 198  
 かきのみむし..... 126  
 なつめのみむし..... 204  
 鳥 羽 蛾 科  
 ぶどうとりは..... 221  
 硝 子 蛾 科  
 こすかしば..... 193, 199  
 ぶどうすかしば..... 209  
 遊 債 蛾 科  
 みのむし..... 97, 128, 159, 165, 193  
 刺 蛾 科  
 いらむし..... 81, 124, 165  
 なしいらむし..... 97  
 斑 蛾 科  
 なしのほしけむし(りんごすか  
 しくるは)..... 81, 115  
 うめすかしくるは..... 170  
 ぶどうすかしくるは..... 214  
 夜 蛾 科  
 くはごまだらひとり..... 230  
 尺 蠖 蛾 科

なしのみどりしやくとり..... 88, 12  
 もゝのみどりしやくとり..... 176  
 うめしやくとり..... 171, 182  
 夜 蛾 科  
 もゝのはなむし..... 97, 184  
 あげびのこのはが..... 153, 188, 222  
 あかあぐりば..... 190, 222  
 うすあぐりば..... 194, 223  
 天 蠶 蛾 科  
 くすさん..... 232  
 ひめやまきゆ..... 199  
 枯 葉 蛾 科  
 うめけむし..... 85, 120, 168, 193, 201  
 かればが..... 93  
 毒 蛾 科  
 かしはけむし..... 120  
 ぶらんこけむし(まいまいが).....  
 .....97, 120, 125  
 きんけむし..... 97, 123, 199, 204  
 どくが..... 120  
 天 社 蛾 科  
 しりあげけむし..... 84, 120  
 いやらほこむし..... 173  
 天 蛾 科  
 びろうどすゞめ..... 215  
 こすゞめ..... 222  
 くるますゞめ..... 222  
 もゝすゞめ..... 193  
 小 灰 蝶 科  
 みどりしぐみ..... 121  
 粉 蝶 科  
 ぶぞしるてぶ..... 115

鳳 蝶 科  
 あげは..... 149  
 くるあげは..... 155  
 ながさきあげは..... 152  
 もんきあげは..... 155  
 雙 翅 目  
 櫻 桃 實 蠅 科(トリベチ科)  
 おうとうみばい..... 208  
 果 物 蠅 科  
 みかんばい..... 154  
 鞘 翅 目  
 金 花 蟲 科(葉 蟲 科)  
 うりはむし..... 97  
 りんごはむし..... 121  
 ぶどうきんさるむし..... 216  
 天 牛 科  
 なしのるりかみきり..... 73  
 りんごかみきり..... 104  
 くはかみきり..... 159, 23  
 しろすぢかみきり..... 235  
 べにかみきり..... 97  
 ほしかみきり..... 128  
 ぶどうとらかみきり..... 211  
 やまかみきり..... 235  
 象 鼻 蟲 科  
 もゝのぞうむし 93, 120, 158, 161, 191  
 くりのすぎぞうむし..... 235  
 くりのみぞうむし..... 234  
 をとしぶみ..... 235  
 ひめをとしぶき..... 156, 235  
 りんごあなぞうむし..... 1, 1, 193  
 りんごこふきぞうむし..... 121

すぐりぞうむし..... 230

金花子科(小金蟲科)

どうがねぶんぶん..... 117, 198, 204, 219

ひめこがね..... 198, 217

まめこがね..... 218

かなぶん..... 223

びろうどこがね..... 97, 193

膜翅目

鋸蜂科

りんごはゞち..... 117

なしはゞち..... 85

なしのおほはゞち..... 87, 202

なしのみげち..... 93

もゝのはゞち..... 193

なうとうばゞち..... 201

すぐりはゞち..... 221

胡蜂科

きばち(ひめすゞめげち)..... 2, 23

あしながばち..... 96

第二

果樹害蟲和名索引

イ

いらむし..... 81, 114, 165

いちやくのみむし..... 225

ハ

はらのながかひがらむし..... 141

はだかかひがらむし..... 235

ホ

ほしかみきり..... 128

へ

へにかみきり..... 97

ト

どくが..... 120

どうがねぶんぶん..... 117, 198, 204, 219

とびいろまるかひがらむし..... 227

リ

りんごのかきかひがらむし..... 98

りんごかみきり..... 104

りんごのわたむし..... 97, 99

りんごじらみ..... 107

りんごのあぶらむし..... 77, 163, 158

りんごのめくらがめ..... 10

りんごのすむし..... 113

りんごはゞち..... 117

りんごのひめしんくひ..... 119

りんごはまき..... 120

りんごのひめはまき..... 120

りんごあをぞうむし..... 121, 193

りんごこぶきぞうむし..... 121

りんごはむし..... 121

ル

るびいろむし..... 127, 136

ヲ

をうとうはゞち..... 201

をうとうみげい..... 203

をとしぶみ..... 235

をかだいせりやかひがらむし..... 155

ワ

わたかひがらもどき..... 122, 158, 227

わたふきかひがらむし..... 131

わたかひがらむし..... 134

カ

かめのころむし..... 97, 154

かさがたかひがら..... 97

かしはけむし..... 120

かきのみむし..... 126

かれはが..... 193

かなぶん..... 23

タ

たまがたかひがらむし..... 196

ツ

つのろうむし... 97, 121, 154, 158, 165  
つまなりはまき..... 97

ナ

なしのくろほしかひがらむし..... 71  
なしのしろながかひがらむし.....  
.....72, 129, 123  
なしのりりかみきり..... 73  
なしぐらみ..... 75  
なしかめむし..... 77  
なしのみどりかみきり..... 106, 156  
なしのみどりあぶらむし..... 78  
なしのほしけむし..... 81, 115  
なしはまき..... 83  
なしはぐち..... 85  
なしのおほはぐち..... 87, 202  
なしのみどりしやくとり..... 88, 121  
なしのしんくひ..... 91  
なしのみげち..... 93  
なしいらむし..... 97  
ながさきあげは..... 152  
なつめのみむし..... 204  
ながくるほしかひがらむし.....  
..... 71, 120, 172, 174, 230

ウ

うめのおぶらむし..... 168  
うめけむし... 85, 120, 168, 193, 201  
うめすかしくろは..... 170  
うめしやくとり..... 171, 182

うりはむし..... 79  
うすゑぐりば..... 194, 223  
うすばつばめ..... 199

ク

くろくるほしかひがらむし..... 143  
ぐんばいむし..... 81, 111  
くだまきだまし..... 155, 172  
ぐんばいうんか..... 155  
くるあげは..... 155  
くはのかひがらむし.....  
..... 97, 165, 173, 197, 204, 230  
くるますぐめ..... 222  
くはかみきり..... 159, 213  
くはごまだらひとり..... 230  
くりのくまあぶらむし..... 231  
くすさん..... 232  
くりのみぞうむし..... 234  
くりのまるかひがらむし..... 235  
くりのすぎぞうむし..... 235

ヤ

やのねながかひがらむし..... 142  
やまかみきり..... 235

マ

まいまいが..... 3, 125  
まるめろのまるかひがらむし... 155  
まめこがね..... 218

フ

ぶらんこけむし..... 97, 120, 125  
ふゐろきせら..... 206  
ぶどうすかしば..... 209

キ

きばち..... 2, 95  
きんもんほそが..... 111  
きんもんほそが..... 112  
きんけむし..... 7, 173, 190, 204

ミ

みどりすゞみ..... 121  
みかんのまるかひがらむし..... 138  
みかんのなが ひがらむし..... 139  
みかんのかきかひがらむし..... 140  
みかんのあぶらむし..... 144  
みかんのほむぐりむし..... 147  
みかんばへ..... 153  
みかんのこなかひがらむし..... 155  
みかんのこなじらみ..... 155  
みかんのぞうむし..... 155  
みかんのはまきむし..... 148  
みのむし..... 57, 124, 159, 165, 193

シ

しりあげけむし..... 84, 120  
しやちほこむし..... 173  
しろをびあわふき..... 161  
しろすぢかみきり..... 235

ヒ

ひめこがね..... 198, 217  
ひめをとしぶみ..... 156, 235  
びろうどこがね..... 97, 193  
ひしたかたかひがらむし..... 135  
びろうどすゞめ..... 215

ぶどうとらかみきり..... 211  
ぶどうふたてんよこばひ..... 212  
ぶどうすかしくろは..... 214  
ぶどうきんさるむし..... 216  
ぶどうとりは..... 221  
ぶどうはまき..... 222

コ

こなかひがらむし..... 64  
こみどりよこばひ..... 110  
こすかしば..... 193, 199  
こすゞめ..... 222  
こがたのきのはが..... 153  
こふもりが..... 193

エ

ゑぞしるてふ..... 115

ア

あしながげち..... 96  
あをいとんぼ..... 97, 120, 158  
あかまるかひがらむし..... 157  
あなばはごろも..... 97, 127, 146, 173  
あげは..... 149  
あげびのこのはが..... 153, 188, 222  
あかゑぐりば..... 190, 22

サ

さんほぜいかひがらむし.....  
..... 67, 98, 167  
ざくろのふくろかひがらむし... 162  
ざくろのあぶらむし..... 164

ひめやまのゆ…………… 199

モ

もゝのしんをりむし…………… 91, 174

もゝのみどりしやくとり…………… 176

もゝのはまきあぶらむし…………… 178

もゝのみどりあぶらむし…………… 180

もゝのあぶらむし…………… 180

もゝのはまきむし…………… 182

もゝのはむぐりむし…………… 183

もゝのはなむし…………… 97, 184

もゝのしんくひ……………

…93, 118, 152, 161, 161, 186, 198, 235

もゝのひめしんくひ…………… 157, 187, I, 8

もゝのぞうむし 93, 120, 158, 161, 191

もゝすゞめ…………… 193

もゝよつてんぼそが…………… 193

もゝのはゞち…………… 193

もみちのわたかひがらむし…………… 97

もんきあげは…………… 155

ス

すもゝあぶらむし…………… 163, 194

すぐりのあぶらむし…………… 227

すぐりはゞ…………… 229

すぐりぞうむし…………… 230

大正四年九月十七日印刷  
大正四年九月廿二日發行

果樹の害蟲奥附  
正價金壹圓貳拾錢

著者

高橋

獎

發行者

野口健吉  
東京市日本橋區十軒店町八番地

印刷者

畑竹次郎  
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所

博信堂印刷所  
東京市神田區三崎町三丁目一番地



發行所

東京市日本橋區十軒店町八番地  
振替貯金口座東京一〇七番

書肆 裳華房

行發房華裳肆書  
覽一書考參學科各

望所御りあ録目書圖細詳  
す呈送第次込申は君諸の

菜之文注御

- 一 御注文の節は著者書名冊数及び御住所御姓名等を楷書にて明瞭に御認め被下度本書は不明の爲め往々差支を生じ候場合有之候に付爲念申上置候。
- 二 御注文は總て前金にあらざれば一切御送り不申候尤も諸官廳學校等の御注文は此限にあらざ候。但し公文を證明する公印なきものは送附不仕候。
- 三 郵便爲替は日本橋十軒店郵便局宛に御取組被下度候△郵券代用は必ず一割増の事。
- 四 運賃又は郵税及び小包料は書名の下に一々記載の通り書籍代の外に實費申受候。
- 五 振替口座は「東京一〇七番」加入致居り候手数料僅か一錢(二十圓迄)にて最も確實便利なる方法なれば送金兼通信法として御利用被下度候。
- 六 代金引換小包郵便の御注文は全體價格の三分一以上前金御送附にあらざれば折角の御申込も御注文と見做さず前以て御斷り申上置候。
- 七 諸雜誌の御注文は總て前金を要す郵券代用は一割増。但し代金の領收證は差出さず雜誌到着を以て金圓領收と御思召し被下度候。

東京市日本橋區十軒店町八番地  
肆華裳房販賣部

郵便振替貯金口座東京一〇七番  
電信略號ヨシノ電話本局一千一

防豫的際實の蟲害菜蔬  
るさ盡に書本は法除驅

農商務省農事試驗場  
技師米國理學士  
農商務省植物檢査所  
牧賀支所長

桑名伊之吉君閱  
高橋 獎君著

最新刊

蔬菜の害虫

菊版洋裝特製全一冊  
精巧圖版六十餘圖  
定價金八拾錢  
郵送料十二錢

次目要主書本

- 第一、蔬菜害虫の形態
  - 第二、害虫の經過習性
  - 第三、害虫の驅除法
  - 第四、害虫の豫防法
  - 第五、菜菔及菜類の害虫
  - 第六、胡蘿蔔の害虫
  - 第七、牛蒡の害虫
  - 第八、甘藷の害虫
  - 第九、馬鈴薯の害虫
  - 第一〇、里芋の害虫
  - 第一一、薯蕷の害虫
  - 第一二、百合の害虫
  - 第一三、葱姑の害虫
  - 第一四、蓮の害虫
  - 第一五、山葵の害虫
  - 第一六、生薑の害虫
  - 第一七、葱及頭葱の害虫
  - 第一八、活獨の害虫
  - 第一九、蔕の害虫
  - 第二〇、石刁柏の害虫
  - 第二一、野蜀葵の害虫
  - 第二二、筍の害虫
  - 第二三、茄の害虫
  - 第二四、蕃茄の害虫
  - 第二五、胡椒の害虫
  - 第二六、瓜の害虫
  - 第二七、豌豆の害虫
  - 第二八、蠶豆の害虫
  - 第二九、菜豆の害虫
  - 第三〇、草蓐の害虫
  - 第三一、玉蜀黍の害虫
  - 第三二、料理菊の害虫
  - 第三三、紫蘇の害虫
  - 第三四、蔬菜害虫以外の有害動物
- 附 録、和名索引・分科索引

行發房華裳京東

富士川博士著	日本醫學史	著名	金四圓五拾錢
岡田俊太郎編	藝 藩 通 志	冊五全	送料拾八錢
富士川博士校訂	奧羽觀蹟聞老志	中刷印	正價未定
洞巖・伊勢編	座 右 之 銘	版六十	送料金三十錢
長田偶得校訂	六無齋遺墨	挿入	送料金四錢
長田偶得編	六無齋遺草	挿入	送料金四錢
林子平著	德川三百年史	全二冊	中卷五圓半錢
林子平著	五山文學全集	全二冊	下卷四圓半錢
上村觀光編	法王帝說證注	三冊	金三圓
狩谷披齋證注	匏 庵 遺 稿	本洋	送料金四錢
長田偶得校訂	萩 園 遺 稿	本洋	送料金四錢
栗本鋤雲遺稿	邦語英文法新講義	版四	金一圓七拾錢
栗本學士編	初等英文法講義	版三	送料金八錢
三浦千春遺稿	英和最新商用通信	版二	送料金八錢
吳博士編			
宮井早大教授著			
宮井安吉著			
マスターオブ			
、ツ中山五郎著			

### 近 刊 豫 告

三宅理學博士著	昆蟲學大綱	上巻	十月發行
三宅理學博士著	昆蟲學大綱	下巻	十二月發行
谷津理學博士著	新撰生物學	初近	正價未定
愛知理學博士著	電氣及磁氣	初近	九月發行
中川技師著	農 藝 電 氣	初近	九月發行
農學大工原君著	土壤・肥料講義	初近	九月發行
明峰教授著	增訂作物育種學	初近	十月發行
高橋農學士著	稻及米之研究	初近	十月發行
山崎農學士著	農村問題叢書 第二編	初近	十月發行
松本教授著	蔬菜園藝講義	初近	正價未定
高橋技師著	果樹の害虫	初近	九月發行

多田喜造著	最新梨樹栽培書	刊新	金六拾五錢
池本文雄著	最新苹果栽培書	版七	送料金六錢
盧貞吉著	蔬菜促成栽培書	版四	送料金六錢
藤原梅次郎著	蘭草栽培書	版初	送料金拾錢
出田學士著	植物病理學	版三	送料金八錢
川上學士著	植物生理學	版五	送料金四錢
河北學士著	有機化學	版再	送料金四錢
中川源三郎著	氣 象 學	版三	送料金四錢
河北學士著	無機化學	版再	送料金四錢
佐藤益助著	農用物理學	版再	送料金四錢
原口邑志著	實用育馬要論	版初	送料金八錢
辻正章著	日本馬耕新書	版初	送料金四錢
三橋學士著	牛乳と衛生	版再	送料金六錢
出田學士著	農作物病害正圖	版四全	各輯二圓

藤田學士著	醸造用大麥論	版初	金五拾錢
堀學士著	農作物生理學	版五	送料金四錢
一戸博士著	誰にも分る曆の話	版四	送料金六錢
一戸博士著	星	版新	送料金十二錢
一戸博士著	月	版新	送料金十二錢
川上學士著	花	版新	送料金八錢
小倉學士著	誰にも必要なる星の圖	版新	送料金八錢
小倉學士著	通俗潮の理	版新	送料金六錢
石龍子著	性相學精義	版三	送料金八錢
石龍子著	性 相 學	版三	送料金八錢
石龍子著	性 相 講 話	版四	送料金四錢
石龍子著	形貌學講義	版三	送料金八錢
東京理科大学	動物學雜誌	日行	一冊送共六錢
東京理科大学	植物學雜誌	日行	一冊送共六錢

京都醫科大學教授 醫學博士 松下 二君著	東京農科大學助教授 醫學博士 三宅 恒方君著	米國 理學士 桑名伊之吉君著	米國 理學士 桑名伊之吉君著	植物學士 高橋 獎君著	佐々木博士序・桑名理學士閱 植物檢查官 高橋獎君著	理學士・農學士 藤田經信君 米國理學士 大瀧圭之介君合著 農商務省技師 日暮忠君著	東北帝國大學農科大學教授 理學士・農學士 藤田經信君著	藤田 圭之介君共著	農商務省水產講習所技師 養殖學專攻 日暮忠君著	理・農學士 藤田經信君著
新撰生理衛生	昆蟲學大綱	昆蟲學研究法	蔬菜之害蟲	果樹之害蟲	日本魚類圖說	日本水產動物學	魚類查定法	水產養殖學	歐米水產大觀	
上卷再版 下卷再版	近刊	再版	新版	新刊	全部完成	增訂三版	初版	新刊	新刊	
菊判特裝 全二册	菊判洋裝 全二册	菊判美本 全一册	菊判洋裝 全一册	菊判洋裝 全一册	菊四倍判 全六輯	大判洋裝 全二册	菊判美本 全一册	菊判美本 全二册	菊判美本 全一册	
合本特裝金三圓七拾錢 小包料金二圓四拾錢 上・一圓七十錢・下金二圓 小包送料各拾四錢	印刷中正價未定	正價金壹圓貳拾錢 送料金八拾錢	正價金八拾錢 送料金八拾錢	正價金壹圓貳拾錢 送料金拾貳錢	合本金拾貳圓 送料各八錢 各輯金貳圓・送料各八錢	上卷金二圓五拾錢 下卷金三圓四錢 小包料各金拾六錢	正價金四拾錢 送料金四拾錢	上卷金壹圓七拾錢 下卷金壹圓八拾錢 小包料各拾貳錢	正價金貳圓也 小包料金拾貳錢也	

東京帝國大學農科大學教授 理學博士 池野成一郎君著	理學博士 宮部金吾君著	農學博士 出田新君著	農學博士 關根恒三君著	農學博士 藤田經信君著	前川源三郎君著	前川源三郎君著	理學博士 長岡半太郎君著	佐藤政資君著	理學博士 一戸直藏君著	理學博士 一戸直藏君著
增訂植物系統學	增訂日本植物病理學	日本植物病理學續篇	生理化學實驗法	顯微鏡用藥劑便覽	實用氣象學	天氣講話	無線電信	天文學	天文學	天文學
新刊橫組	七版	近刊	再版	改版	再版	新版	再版	上卷新刊	下卷近刊	
大判洋裝 全二册	大判洋裝 全二册	大判洋裝 全一册	菊判洋裝 全一册	袖珍特裝 全一册	菊判洋裝 全一册	菊判洋裝 全一册	菊判洋裝 全一册	菊判洋裝 全一册	菊判洋裝 全一册	
合本金拾圓・送料卅二錢 上卷正價金四圓也 下卷正價金四圓也 送料各金廿四錢	合本金八圓・送料卅二錢 上卷金三圓・下卷金五圓 小包送料金廿四錢	印刷中正價未定	正價金貳圓參拾錢 郵送料金拾六錢	正價金八拾五錢 郵送料金八錢	正價金三圓五拾錢 郵送料金拾八錢	正價金壹圓貳拾錢 小包料金八錢	正價金九拾錢 小包料金八錢	正價金壹圓八拾錢 小包料金八錢	正價未定 印刷中	



東林學博士 北農科大學 新島善直君著	福岡縣林業技師 村斷夫君著	東北農科大學教授 工學士阪岡末太郎著	東北農科大學助教 農學士明峯正夫君著	農學士高橋陸郎君著	農學士山崎延吉君著	我農生山崎延吉君著	農學士山崎延吉君著	天涯生山田太郎君著	農學士原澄次君 林學士山崎嘉夫君 鈴木敏夫君合著	日本森林保護學	實用森林數學	實用測量學講義	增訂作物育種學	稻及米之研究	農村之經營	農家之經濟	地方改良の話	增訂理想之農村	農林家必携
再版	二版	前九版 後七版	再版	新刊	五版	增訂八版	三版	十一版	五版	再版	二版	後九版 前七版	再版	新刊	五版	三版	十一版	五版	
全菊判洋裝 二册	全菊判洋裝 二册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 二册	全菊判洋裝 一册	全四六册版	全四六册版	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 二册	全菊判洋裝 二册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全四六册版	全四六册版	全菊判洋裝 一册	
下卷金一圓八拾錢 上卷金一圓七拾錢	下卷金一圓七拾錢 上卷金一圓八拾錢	前送金一圓七拾錢 後送金一圓七拾錢	印刷中	米之卷金一圓七拾錢 稻之卷金一圓七拾錢	正價金一圓五拾錢 郵送料金拾六錢	正價金八十五錢 郵送料金八十五錢	正價金五拾六錢 郵送料金五拾六錢	正價金九拾八錢 郵送料金八拾八錢	正價金七拾六錢 郵送料金七拾六錢	正價未定	正價未定	正價未定	正價未定	正價金一圓五拾錢 郵送料金拾六錢	正價金五拾六錢 郵送料金五拾六錢	正價金五拾六錢 郵送料金五拾六錢	正價金九拾八錢 郵送料金八拾八錢	正價金七拾六錢 郵送料金七拾六錢	

農學博士 清永元太郎君共撰	右田陸軍醫學士 口陸軍醫學士 原田辰雄君著	根岸練吉君編	前田辰雄君著	原鳥獸醫學士著	橋本博士外八大家著	農學士河村九淵君著	農學博士大工原銀太郎君著	橫田英夫君著	渡邊・土屋共著	蘋果圖譜	新種牛圖譜	實用育牛大鑑	畜產學講義	產馬大鑑	土壤肥料講義	農村救濟論	內外商業鑑
實物大 刷大	新刊	新刊	三版	四版	四版	三版	新刊	三版	二版	新刊	新版	三版	四版	四版	新刊	三版	二版
菊四倍大 美裝綴	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全大判 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	美裝綴	美裝綴	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全大判 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册	全菊判洋裝 一册
正價金八圓四也 郵送料金廿四錢	正價金二圓四也 郵送料金拾六錢	正價金二圓四也 郵送料金拾四錢	正價金二圓四也 郵送料金拾貳錢	正價金四圓也 郵送料金拾八錢	上卷金一圓七拾錢 下卷金一圓五拾錢	正價金八拾錢 郵送料金八拾錢	印刷中	正價金一圓三拾錢 郵送料金拾貳錢	正價金三圓五拾錢 郵送料金拾六錢	正價金二圓四也 郵送料金拾四錢	正價金二圓四也 郵送料金拾貳錢	正價金二圓四也 郵送料金拾貳錢	正價金八拾錢 郵送料金八拾錢	正價金四圓也 郵送料金拾八錢	正價金一圓三拾錢 郵送料金拾貳錢	正價金三圓五拾錢 郵送料金拾六錢	

東北帝國大學農科大學教授  
工學士 阪岡末太郎君著

最新鐵道工學講義

各卷重版

菊判洋裝  
全八册

總頁數二千四百頁  
全部製本出來

第一卷	軌道論	三版	菊判美本	正價金壹圓八錢也 郵送料金八錢
第二卷	轉轍器・轍叉器 道床築造論	三版	菊判美本	正價金一圓五拾錢 郵送料金拾貳錢
第三卷	線路測量論	二版	菊判美本	正價金一圓三拾錢 郵送料金八錢
第四卷	信號論	新刊	菊判美本	正價金一圓五拾錢 郵送料金拾貳錢
第五卷	停車場論	新刊	菊判美本	正價金一圓五拾錢 郵送料金拾貳錢
第六卷	車置輛雜論	新刊	菊判美本	正價金一圓五拾錢 郵送料金拾貳錢
第七卷	鐵道經濟論	新刊	菊判美本	正價金一圓四拾錢 郵送料金八錢
第八卷	鐵道力學	新刊	菊判美本	正價金一圓五拾錢 郵送料金拾貳錢

358  
78

7

終